
異世界の弟

鈴木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の弟

【Nコード】

N3408Q

【作者名】

鈴木

【あらすじ】

趣味のオリジナル美少女ゲームの製作に没頭していた安部瑞樹は、突然白い光に包まれて見知らぬ池に落ちた。なぜか女の体になっていることに驚愕しつつも、中身が喪男ではハプニングは起きない。三次は惨事、愛でたいのは二次元和風美少女のみ。けれどまわりは三次元の西洋系ばかりという残念なお知らせの中、魔法の使い方、使い道を模索しつつ二次元の嫁を追求め。異世界でもぬるく趣味に奔走する日常的物語。※主人公の言動は一部大変偏っていますのでご注意ください。

01:プロローグ

【桜子】 「桃子、いまならまだ貴女は引き返せるのよ」

【桃子】 「いいえ、いいえお姉さま。桃子はお姉さまのお側にいられるだけで、それだけで……」

【桜子】 「……わたくしもよ」

カチャカチャと小気味よい音を立てながら、調子よくキーボードを叩いていく。

ノートパソコンのディスプレイには、ノベルゲームを作るためのソフトが起動していた。

これで5作品目でもあり、使い慣れているのでフラグ管理も簡単だ。

こんな高度な制作ソフトが無料で本当にいいんだろうか。まあいいんだろう。

ありがたやありがたや。

俺がいま黙々と作っているのは、明治や大正っぽい雰囲気、華族とかお嬢様とか女学校とか、素敵ワードだけをいいとこ取りにした、浪漫溢るる女の子同士の恋愛ノベルゲームだ。

そう、いわゆる百合ゲーの自主制作中なのである。

現実の女は冷たいし怒鳴るし怖いしでなんだかわけがわからないけれど、二次元のおにゃのこはただひたすら優しく可愛いのだ。それも今回俺が生み出した桃子と桜子は特に素晴らしかった。可愛くて綺麗で清楚で昼は淑女で夜も淑女、でもほんのりとムフフなわけですよ。

この『ほんのり』ってところが今回の最大のポイントです。

あからさまなエロティックももちろんいいものだが、袴の裾からチラリと見える肌と足袋との境界線にハツとするってのが粹ってんです。

っかー！ たまりませんなあ！

俺にとってノーマルカップリングものは、すでに食指の動かないジャンルに成り下がっている。

普通の男女の恋愛話では、ゲームだろうと小説だろうとどこか物足りなさを感じてしまうのだ。

いや、ちゃんと面白いとは思っている。思っている。

ワクテカ胸熱させてくれるストーリーはいっぱいあるし、それはそれで素直に面白い。

しかし彼女いない暦24年目、派遣社員として過ごした一年半で会社員の肩書きは終了し、ニートとなってもう半年。

男に都合のいい物語では、たとえば俺が二次元の世界に行けたとしてもそんな展開にならんわー、ありえないわー、リア充爆発しろ的な冷めた気持ち湧き上がってきてしまい、センチティブなマイハートをあまり癒してはくれなくなってしまった。

だけど百合モノだけは別だ。別格だ。

自分にはなにをどう逆立ちしてもできない、とことん手の届かない天上のジャンルだからだろうか。

砂糖菓子のように甘く麗しい少女たちが、キャツキャウフフしている物語はとていいものだ。

それだけでもう胸がキュンキュンするんだぜ。ドウフフフフ。

俺は先日描いておいた、桃子と桜子がそっと寄り添って小指だけを絡ませている絵をスプリクトに組み込み、テストプレイを開始した。
スチル

桜吹雪の背景画像が、ゆっくりとふたりの画像に変わっていく。
うん、いい出来だ。これは最高傑作の予感！
笑み崩れてだらしなくニヤニヤした、そのとき――

――……さん！　よう……く……が……――

幻聴がした。

嬉しそうな男の声が、なんというか脳の内側から直接聞こえたり
した、ような……？

「……ははは。なんちゃってな！」

くそっ、厨二病め、まだ完治していなかったのか。

声だど？　気のせいだ。気のせいに決まっている。どうせ家外の
声でも響いてきたんだろう。

丸一日ずっと根をつめて作業をしていたので疲れているんだ、間
違いない。

しかし視界が真っ白にぼやけていくほど疲労が溜まっていたとは
驚きだ。

くらくらと眩暈がするほど脳に負担がかかっていたとは思わな
かった。

元々ひとつのことに集中してしまうと周りが見えなくなる性質だ
が、今回はちょっとやばいかもしれない。救急車は何番だ。携帯は
どこだ。

――……い……ん！――

白い靄の中に、なぜか薄ぼんやりと男が見える。
なんだ夢か。どうせ夢なら桜子にしてくれ、俺の潜在意識よ。
リア充っぽいイケメンの嬉しそうな顔など見たくもない。

ただ、その顔にはなぜか既視感があった。

見たことがあるというよりは、なんだかちよつと誰かに似てるような気がしないこともないというレベル。

しかし誰かって誰だ。

いかにも日本人らしい、黒髪黒目の和風美青年。

そんな奴、ちよつとしかない知り合いの中にはもちろんいない。
テレビで見たどこぞのアイドルの記憶でも混ざっているんだろうか？

……まあどうでもいいか、しょせんイケメンの男は全部敵だし。

俺は夢の中で近づいてくる男をしっしつと追い払った。

とたん、白い空間に渦が巻き起こる。

男が焦ったように手を伸ばしてきたので、掴まれたくない俺は渦にグルグル回されながらも後方へと体を傾けた。

うあー視界が揺れる。気持ちわるう。

男はまるで絶望でもしたかのような表情で、必死になって俺に手を伸ばしている。

懸命に何かを叫んでいるが、声はまったく聞こえない。

その鬼気迫る様子に、なんだかちよつと申し訳ないような、まるで俺が悪いことでもしてるかのような、変な罪悪感が湧き上がった。

……仕方ない。

男が何を言っているのかくらいは聞いてやろう。

爪先に力を入れる。

軽くトン、と蹴ったつもりだったのに、すごい勢いで前に進んだ俺の体は、目を見開いた男にぶつかり、そしてすり抜けていった。

02..なくした銃身

バシヤン！

「うぼお！？」

水！？　なぜに水！？

顔から突っ込んだので、俺は慌てて防衛本能のままに手を動かした。

「ぷはあ！？」

そこはとても浅かった。すぐ手がついた。足もついた。

俺は四つんばいになってハアハアと息を切らす。

あーびっくりした、あーびっくりした！

マジ溺れるかと思ったっての！

心臓がびびってドコンドコン鳴っている。

背中に藻でもついているのか、モゾモゾして気持ち悪い。

それになんだかすぐく体がだるい。頭もクラクラする。

混乱したまま、俺はどっこいしょと座りなおしつつ背中に手をやり、邪魔な藻を取り除こうとした。

「って痛たたたた！？」

藻かと思ったものは、なんと自分の髪だった。

っーか髪！？　なんでこんな伸びてんだ！？

俺はニートではあったが、その経歴はまだ半年足らずと浅い。ボサボサでもまだ短いといえる髪型だった。

だというのに、だ。

手にした髪はすごく長い。濡れてつやつや黒光りしている。

このゾワゾワ背中にくつつく感じからすると、どうも腰近くまであるんじゃないだろうか。

呆然と手の中の髪を見下ろしたとき、視界の中に不思議なものが見えた。

三角形だ。

「……………」

きめ細かく透き通るような肌色の三角形は、おわんを伏せたみたいになだらかな形をしている。

そのてっぺんはさくらんぼのように淡く色付いている。

「……………」

ふに。

ふにふにふにふに。

「……………」

なんというか、なんというか、なんていったらいいんだろう。

柔らかいのに張りがあって弾力もありつつ手にしっかりとフィット。

そっと下から押し上げるように手で支えようと、意外と重かった。

「……………」

右手を水の中に沈め、そつと股間に伸ばしてあるべきものを探してみた。

ぺたっ。

……ない。

そつと手を胸に戻し、俺のビッグマグナムがあるべきところを見つめてみても、玉も銃身も見当たらない。

「……………」

……あーあーそうか、そういうことか。

夢だ。

なんだまだ夢見てるのか、なーんだ。

おにゃのこになって、めくるめくユリユリ体験できたらなあとか考えたことあるからかなー。そうかそうかー。

しかし、俺は三次元には興味……ふにふに。

うーむ乳ってこんな感触なんだな……ふにふに。

でも別に、揉んでもまったくこう、なんていうか……ふにふに。

手のひらが天国なだけで、アンツてことにはならないもんだな……

……ふにふに。

まあ夢だしなあ……ふにふに。

つか水が澄み過ぎると、水面が鏡みたいにならないんだな……

……ふにふに。

今どんな顔になってんのか見たかったのに……ふにふに。

っつかしこれ、なかなかでかい乳だよなー……ふにふに。

ふにふにふにふにふにふにふにふにふに……ふにふに。

「……………」

風が吹いて、サワサワと木の葉の擦れる音がする。

気温は低くはないが、水に濡れているせいでけっこう肌寒い。

なんだかとてもなく嫌な予感がするので、正直見たくはなかったが、俺はゆっくりとあたりを見回した。

日が翳ってきているのか、それとも昇ってきているのか、茜色に染まっている空。

透明度の高すぎる小さな池の周りには、鬱蒼と茂る木々が林立している。どこまで続いているのか見当もつかない。

だからこの森はどこなんだよ。

この澄み切った池は何なんだ。

なんで俺は女になって、どうしてすっぽんぽんなんだ。

服はどこいった。尻の下の小石がちよつと痛いんだけど。

それにこれが夢なら頭イッちゃってることになるくらい、ものすつごく現実っぽいんだけど。

「うーおーあー！！　ここはどこだあー！　どーなってんだあー！！」

バシヤンバシヤン！！

両手を水面に叩きつける。

冷たい。痛い。

わかりやすく現実っぽい。

いやもう認める。認めます。

「現実、だと……これがリアルだということか……。つーか俺の声、
てら可愛いんですけど」

聞きなれたダミ声は、どこぞのアニメキャラかとも言いたくなるほどに、とても甘く可愛らしいものにクラスチェンジしていた。

03：ファンタジック

「夢っばいけどー、夢じゃなかったー。わー」

あーもー本当にいい声。可愛い声だなあ。

我が声ながら惚れ惚れしちゃうね。マジ天使。

「でもどうする。人前に着ていく服がない」

素っ裸で池の中。

男でもまずいの、女の体じゃあより悪い。

しかもこれ夕焼けだ。空がどんどん暗くなってきている。

ずっと水の中にいるわけにもいかなないので、俺は重い体を引きずって、のそのそふらふら池から出た。

濡れた長い髪がすごく重い。首が痛い。髪切りたい。

ロングの女は風呂に入るたびこれに耐えてるのか。なんという拷問。Mだな。

「……ふう」

綺麗そうな葉の上にしゃがみこむ。

あーどうしよう。マジどうしよう。

ほんと何がどうなってこうなってんの。

ここどこの山奥よ。今夜をどうやって乗り切ればいいんだよ。

「……はあ」

もう一度ため息をついたそのとき、背後でパキッと枝が折れた音がした。

「――っ!？」

ビクリとして振り返ると、10メートルほど先で俺を見ている男がいた。

外人だ。とてもファンタジックな姿をしている。

マントだ。ケープだ。ローブだ。外套だ。

足元まであるズルズルしたそれを纏った女は、慌てたように下を見たあと、俺に視線を向けた。

枝を折ったのはたぶん彼女なのだろう。

男はそんな女をかばうように前にいた。

長身の男のマントは短く、丈は腰ほどまでしかない。前が開いていて、右手に抜き身の剣を持っている。

それほどごつくはないが、いかにも前衛っぽい。

ていうか剣ですよ。なんか無骨な実用性重視っぽい剣ですよ。

夕日に照らされてキラッと光りましたよ。

水に濡れているせいではない寒気がします。

ピンチっぽい。とてもピンチっぽい。

身を守るものは布一枚ないんですけど。せいぜいそこの葉っぱくらいなんですけど。

俺は震えながらジリジリと後ずさった。

なにこれ、俺どうしたらいいのこれ。

怪しいものではありませんつつたって通じるのか？

キャンアイヘルプミー？

パニックに陥っていると、女のほうが数歩前に出た。

「下がってろ」

「だって、怯えているから……。ほかに人の気配はないんでしょう？」

「ない、が……」

「それなら大丈夫よ。――あの！　どうかなさったんですか？」

どうかしてます現在進行形で。

女性はどうやらい人みたいだ。

いやしかし油断するなこれは孔明の罠かもしれない。

それにどう説明するんだ。

なぜか池に落っこちて素っ裸でした？　超怪しいんですけど。

落ち着け。落ち着くんた。

「あ、あの……」

呟いたその声の高さで思い出す。

そうだった、いまの俺って女だったんだ！

よし、これで勝つる！

「あの、あ、あなたはだれですか？　ここは、どこなんでしょう、か……？」

意識をするまでもなく、俺の声は震えてビクビクオドオドしていた。

グッジョブ俺。

対人スキルの低さが功を奏するとは、まったく何が役立つかかわらんもんだ。



女性はレスル・サナさん、男はレスル・クルークというらしい。
俺もどもりながら名乗った。

「あ、安部、瑞樹、です」

ふたりともカフェオレのような髪の色をしている。姉弟だそうだな。
なるほど、レスルは家名か。先に来るのは日本と同じなんだな。

職業は傭兵で、近くの村に実家があつて、いまは畑の手伝いに帰
つてきているらしい。

ああそう、傭兵。傭兵ね。

よう、HEY！ なんちゃってあは、ははは、ははははは……。

……マジでどこだよここ。

現代にこんな格好した傭兵なんてまだ実在すんのか。

それともタイムスリップした中世とか？

いやいや待て待て、そう結論付けるのはまだ早い。

こういうときは落ち着いて、じっくりと相手の出方を待つのだ。

サナさんは最初にクルークのマントをひったくつてきて、素早く
体に巻きつけてくれた。

暖かい。とてもありがたい。いい人だ。

なにやら疲労回復薬だという液体もいただいた。ちょっと抵抗が
あったが笑顔で押し切られた。

少しだけ舐めてみると、フラフラしていた重い体が劇的にシャキ

ッとした。とてもありがたい。いい人だ。

足も布で包んでくれた。

多少違和感があるが、裸足より断然マシだ。とてもありがたい。いい人だ。

結論、サナさんはいい人だ。この人にくつついていこう。

ふたりは俺を怪しまず、ただのか弱い男、もとい女だと正しく理解してくれているようだ。

これが元の男の姿だったら、小鳥のように震えていても気持ち悪いだけで、ふたりもここまで親身になってくれなかったに違いない。女でよかった。女って得だな。

体調が良くなった俺は、ふたりと一緒に森を抜けた先にあるという村を目指している。

歩きながら、俺は気がついたらここにいて、服もなくて困っていたとしどろもどろに伝えた。

サナさんは「まあ……」と呟いて険しい顔をし、クルークは俺の顔を横目に見てそっと視線を逸らした。

いろいろ訊ねたい気持ちはあったものの、持ち前の人見知りを発揮してしまい、どうにも言葉少ないままだった。

だって外人だぞ。それも中世風ヨーロッパな。それにふたりともでかいし。

いくら同年代っぽくてもびびるっての。無理無理。超無理。

まあ、なんか言葉は通じてるけどさ。

耳に入ってくる単語も、俺が話す言葉も日本語じゃないけどさ。英語でもないけどさ。

……………。

深く考えたら駄目だ。そんな気がする。

うん、ここはとりあえず、本能に従っておこう。

言葉がわかるのは悪いことじゃない。むしろいいことだ、そうだそうだ。

しかしここ半年、スーパーの店員さん以外と話したことのない俺は、どうしても挙動不審になってしまう。

それを怯えと受け取ってくれたのか、深く突っ込んだことを聞かずに、サナさんはのんびりと優しく話をしてくれた。

「ここはエールズ領の西の森です。街道からだいぶ外れてるので、あまり人は来ません。でも薬草がいっぱいあるので、私たちはそれを摘みに来た帰りです」

籠にたっぷり詰まった草花を見せながら、サナさんは説明してくれる。

「これはイゴ、アサキ、この花はウツハミ。疲労を回復してくれます。さっきの薬にも入っていたんですよ」

「そ、そうですか……」

「もう少しすれば森を抜けます。エポは小さい村だけど、のんびりしていいところです。なんにもありませんけどね」

「そ、そうですか……」

「宿もありませんので、私たちの実家は普通の農家ですけど、眠る分には支障がないと思います。ミズキもそれでいいですか……？」

「た、助かります。ありがとうございます」

見知らぬ森で野宿かと戦々恐々としてたというのに、屋根の下と
うだけで十分です。文句なんて言ったらバチが当たります。

俺はペコペコと頭を下げた。

にっこり微笑むサナさんの雰囲気はとても柔らかい。

彼女は三次元の女性にしては、破格的にいい人なのだろう。ありがたやありがたや。

04：断じて違う

夕日が沈んだ頃に到着したエポの村は、予想外に広がった。
つーかめちやくちゃ広がった。

畑が延々と広がる村全体を、どうやらぐるりと木の柵が囲っているようだ。ようだ、というのは暗いということもあるが、なんとつて柵の端が見えないからだ。

これで小さいとか。はははワロス。

村に到着してからも、しばらく農道をてくてくと歩いた。

ようやく着いた村の中心らしき場所に、ぽつりぽつりと間隔を空けていくつも家が立ち並んでいる。

そのほとんどは明かりが灯っておらず、シンと静まり返っていた。

俺の大学時代の専攻は日本文化史だ。

いわゆる3流底辺で、しかもあまり真面目に授業を受けていなかったのでアレだが、単位のためにそれなりに通っていた。

まあ、あくまでもそれなりにだ。多くを期待してはいけない。

とりあえず、ここを中世の農村だと仮定してみよう。

たしか日本だろうが西洋だろうが、農民にとっては日が落ちたら就寝タイムということになっていたはずだ。

サナさんたちは平然としているし、別にホラーのように村に戻ったら農民が死に絶えていたというわけでもなさそうだ。

だからこの状態が当たり前なのだろう。

そう結論づけたものの、その事実を目の当たりにして、俺は少な

からずカルチャーショックを受けていた。

だって中世だぞ。またはせいぜい近世か？ どっちにしろ意味がわからん。

俺はあの部屋に帰れるのだろうか。あのお宝の詰まった大切な場所へ。

薄闇の中をキョロキョロと見回しつつ、サナさんについて小さな明かりが灯っていた一軒の家に入った。

「遅い！ もっと早く帰ってこんか！」

蝋燭の淡い明かりに照らされて、ものすごく威圧感のある髭のおっさんがサナさんたちを見るなりそう怒鳴った。

「ごめんなさい。摘むのに夢中になってしまっ

サナさんは素直に謝り、クルークは頭をちょっと下げただけでおっさんをやり過ぐすと、さっさと奥の部屋へと行ってしまった。

「クルーク！ だいたいお前はいつもそうフラフラとほつつき歩きよって」

「お父さん、お父さんったら。そんなに大声を出したら、みんな起きちゃうわ」

「うるさい！ サナ、お前もせっかく学校まで出たというのにいつまでもそんな」

「はいはい、わかりましたわかりました。ところでお父さん、えっと、友達のミズキよ」

「こ、こんばんは……」

「ん？ ……む？」

俺はサナさんの背後から、顔だけ出してペコリと頭を下げた。
「っ！か怖い。外人のおっさん超怖い。ド迫力なんだけど。」

俺があんまりビクビクしているせいか、おっさんは怒りを収めた
ようだった。

太い指でたっぷりした顎鬚をねじり、外人特有の落ち窪んでギョ
ロリとした目玉でじっと俺を見ている。

「は、はじめまして。瑞樹と申します……」

「む、そうか。……うむ」

「ミズキ、父です。驚かせてごめんなさい」

「い、いえ……」

「私の部屋に案内しますね。それじゃおやすみなさい、お父さん」

「あ、あの、し、失礼します……」

「む。そうだな、うむ」

サナさんの後について部屋に入ると、ついホーツと息をついてし
まった。

だって仕方ないだろう。怖いものは怖いんだよ！
まったく無理させやがって！

「ごめんなさいミズキ。怖がらせてしまいましたね」

「い、いえ」

「でも大丈夫です、父は美人に弱いので。緊張して硬直していたで
しょう？ 本当わかりやすいったら」

サナさんはクスクスと笑った。

俺は首を捻った。

たしかにサナさんは美人なのだと思う。

カフェオレに似た髪は肩で切りそろえられ、柔らかく波打ってい

る。

笑うと目じりが下がってふんわりした雰囲気になり、こちらの心も安らぐ。

つまり癒し系だ。

残念ながら、二次元の素直クールな和風美少女を好む俺の趣味ではまったくないが。

しかし、いくらなんでも父親が娘に緊張するはずもないだろう。だいたい、しょっぱなから怒鳴っていた、し……？

——ってまさか、俺か!？

俺だ!!

つかマジか、俺は美人なのか、そうなのか!？

か、鏡! 鏡! ない! くっそ、中世め! 姿見くらい普及してろっつーの!

蝋燭に照らされたサナさんの部屋は、衝立で2スペースに区切られていて、片方はチェストとベッド、もう片方は机と椅子、そして大きな棚が備え付けられていた。

棚には整然と小さな木箱が並び、机の上には量りっぽいものや、すりこぎっぽいものなど、女性の部屋のインテリアとしては一風変わった細々した^{些々}したものが並べられている。

内装や家具は思ったよりも凝ったものが並び、きちんと整っていた。

ガラスは嵌っていないかったが、木製の大きな窓もある。

農家にしては、ずいぶんとしっかりしているようだ。

……なんだかイメージとちょっと違うな。

いまいち時代がよくわからない。もつとちゃんと勉強しておくんだったなあ。

「ミズキ。私のお古で申し訳ないのですけれど……」

サナさんはチェストをこそそ探ると、畳んだ衣服を取り出した。手渡されたものは、シンプルな袖のない薄いワンピースと、もう少ししっかりした生地のあるワンピースと、下着っぽいズロースだった。

袖のないワンピースはたぶんシュミーズみたいなものなんだろう。

なぜあつまりわかるのかといえば、ゴシックでロリータな女の子たちが異能で戦いつつも愛を育む恋愛ゲームも作ったことがあるからに他ならない。

そのときに描く絵の衣装の資料として、いろいろ調べたことがあるからだ。

断じて俺が変態だからではない。

俺はそういった変態ではない。

まあ女の体になったいま、ちと説得力に欠けるとは思うが。

革のサンダルもいただいて、俺は恐縮しながらお礼を言い、身支度を整えた。

サナさんもローブを脱いで身軽になると、食堂に案内してくれた。クルークはすでに席に付き、黙々と食事をしている。

硬そうなパンと、肉と野菜のトマトスープみたいなものがテーブルに並べられ、いい匂いを撒き散らしていた。

「口に合えばいいんですけど……どうぞ」

「あ、ありがとう、ございます」

どうやらパンはスープに浸して食べるらしい。薄いパンを手に取り、真似してスープに突っ込んだ。恐る恐る口に入れてみる。

「美味しい……」

「ふふ、よかったです。たくさんありますから、おかわりもどうぞ」

かなり煮込まれていたのか、肉の出汁と野菜の出汁、バジルっぽい香辛料と塩がちょうど良く効いていて、素朴な味だがとても美味しい。

正直なところ、どうせ味の薄い野菜スープみたいなものだろうと覚悟していたので、これは嬉しい誤算だった。

食べ物美味しいのはいいことだ。

暖かいものを食べて人心地が付いたのか、グッと眠気が襲ってきた。

そういえば、昨日からずっとゲーム製作をしていたのであまり寝てなかったなあ。

パソコンに向かっていたのはほんの数時間前のことなのに、いったいどうしてこうなった……などと思いながら、俺の意識はいつのまにか夢の世界に落ちていった。

05：閑話【レスル・サナ】

水の精霊王レイネ。

そう見間違えたのは一瞬だった。

けれど私が不注意に踏み折った枝の音で振り返った少女は、それほどまでに美しかった。

長い黒髪に彩られた小さな顔は、遠目に見ても驚くほど整っていることがわかる。

一糸纏わぬすらりとした体を縮こめる様子は、強い怯えを感じさせた。

私は弟のマントを奪い、近寄らないよう言いつけて少女に駆け寄った。

近くで見るとますますその美しさが際立った。

学園で見た貴族の子女とも比べ物にならない。

玉のような肌には傷ひとつなく、濡れて艶々と光る髪は漆黒で、これほど黒いのも珍しい。大きな瞳まで真っ黒だ。

どこか異国の血でも混ざっているのだろう、とても神秘的な顔立ちだった。

ほっそりとした手も足も綺麗なことから、やはり貴族、もしかしたらそれ以上に身分の高い人なのかもしれない。

ミズキはあまり多くを語らなかった。

何かやんごとなき理由でもあるのかしらと思い、深く詮索するのはやめておくことにした。

乱暴された様子ではないけれど、こんな美少女が裸で森の中にひとりでいるなんて、きつとよほどのことに違いないもの。

私たちのことを話すうちに、ミズキの中から怯えがゆっくりと消えていくのがわかった。まだどこなく落ち着きはなかったけれど、興味深そうに耳を傾けて話を聞いている。

私たちは農家の子供で、傭兵だとも伝えたのに、ときおり呟く返答はたどたどしくてもとても丁寧なもので、こちらが恐縮してしまうほど。

貴族特有の偉ぶったところがまったくない不思議な少女に好感を覚えた。

家に帰り着いたのが思いのほか遅くなったので、やはり父はうるさく説教をはじめたけれど、案の定彼女を一目見るなりすぐに口を噤んだ。

ふふ、ミズキに感謝しないとね。

怯えさせてしまったのは申し訳なかったけれど、父の口を閉じるにはとても効果的なんだもの。

衣服も食事も、ミズキは眉をひそめるどころか、丁寧にお礼まで言って受け取ってくれた。

黙々とスープを食べる様子は、子ウサギのように愛らしい。

ほぼ食べ終えた頃に、こくりこくりとしだしたかと思えば、そのままスーッと眠ってしまったので驚いた。

まるで妹みたいだわ。

弟にミズキを私のベッドに運んでもらう間も、まったく起きる気配を見せずうとうと寝息を立てている。

予備のベッドはいま兄のところに持ちだしてしまっているの、申し訳ないけれど一緒に眠らせてもらうことにした。

それに万が一、もしかしたら何か起きるかもしれない。

もちろん何も起きないかもしれないけれど、用心はしておかなければ。

ひとりで寝かせるよりは、一緒のほうがずっと対応が楽なもの。
私だって一応魔術士の端くれなんだし、きつと大丈夫。

私は魔力とはまた別の天恵を持っていて、直接触れると人の悪意
や反感の片鱗を少しだけ感じ取ることができる。

ミズキからは、まったく言っていないほど翳りを感じなかった。
こんなに無防備で大丈夫なのかしらと、こちらが心配になってく
るくらいぐっすりと眠り込んでいる。

ベッドに散った少女の黒髪をそっと払いのけて、私も横で眠りに
ついた。

06..鎮座ましまし

眩しさと風を感じて、俺はハッと目を開けた。

これがいわゆる知らない天井か。部屋は見覚えあるけどな。ははは。

「はぁ……」

衝立の奥に見える棚は、昨夜訪れたサナさんのものだ。

大きな窓は開かれていて、陽光がさんと差し込んでいる。

寝て起きても中世。

こうなってしまうば、そろそろ腹をくくらねばならないだろう。

……すいませんちょっと強がり言いました。

本当はいますぐ夢だつてことにしてくれるほうが断然いいです。

とりあえず、現状を整理してみるかな。

ここはまあ中世だとしておこう。

そんな時代で俺はいま女の体になっていて、森の池に裸で落っこちていた。

ようするに無一文だ。

俺は特に頭がいいわけでもなく、体力は最低値で、趣味は同人美少女ゲーム製作、数少ないオタ仲間との交流を兼ねた食べ歩きと聖地巡り。

ようするに役立たずだ。

母は俺が3歳のときに弟を産んで亡くなり、その弟は俺が7歳のとき公園帰りの道で繋いでいた手を離れた一瞬の隙に行方不明になり、父は俺が21歳のときに病で亡くなった。

両祖父母は言うに及ばず召されており、両親とも兄弟はいない。ようするに天涯孤独だ。

まあ失踪してもだれにも心配かけないということだけはいいことだ。そういうことにしておこう。うん。

それよりもだな。

このまま俺がああ時間軸以降、行方不明者として扱われることになった場合。

部屋はそのままなわけだよアンダスタン？

家賃の銀行口座と、貯金の銀行口座はわざわざ分けてあるわけですよ。残高はそう多くなかったはずだ。

底を付いたら、もちろん大家さんが来るわな。

鍵を開けて入ってくるわな。

そう、作りかけの美少女ゲームがそのまんまなわけですよ。

部屋には資料として使っていた二次元のおにゃのこがいっぱいの雑誌やら画集やらきわどいフィギュアやら自作桜子桃子ポスターその他もろもろが散乱し、その上ベッドの脇には独り身の男の紳士の嗜みの穴道具がドーンと鎮座ましましてるわけですよ。

さらにもうひとつもバーンと風呂場に干したままだ。

.....。

.....。

うあああああああああああああっ！！

今すぐ！ 今すぐに！！ 俺を現代に帰らせてくれ！！！！

後生だ、誰かに見つかる前に頼む！！ 頼みます！！！！

俺はベッドに土下座して手を組み合わせブルブル震えたが、どこぞにいるのかもしれない超存在は願いを聞き届けてくれはしなかった。

◇

ひとしきり錯乱したあと、俺はなんとか落ち着きを取り戻した。あれだ、あっちのことは考えない！ そうだそうだそうしよう！これは決して逃避ではないぞ。

むしろ現実と向き合っているんだ。

そうだ、がんばれ俺。負けるな俺。

えー、とりあえず今必要なことでも考えよう。

えー、金。そう金だ。通貨だ。先立つものだ。

それで衣食住を手に入れることができれば、どこであろうと生きることはできる。

生きるだけなら、とりあえず俺でもできるはずだ。たぶん。きっと。盗賊とかいなければ。

……いないよな？

サナさんはとてもいい人そうだから当分は面倒を見てくれそうだが、さすがにこの先ずっとというわけにもいかないだろう。

いくらなんでも出会ったばかりの人にそこまでずうずうしくなれるほど俺の神経は図太くない。

むしろとても繊細だ。ひとりの空間がなくては生きていけないのだ。パーソナルスペースとして6畳1間が必要だ。

いやでもこの家けっこうでかいから空いてる部屋とかあるかもな。
あるんじゃないかな。あるといいな。

とにかく今後も続けて世話になるためにも、ここで一宿一飯の恩を返しておくほうがよいだろう。

しかし家事はまあ母がいなかったのである程度はこなせるが、昨夜見た中世の台所はだいぶ勝手が違ったし、猫の手にもなれるか疑問だ。

農家だと言っているのだから、ここはあれか、農業の手伝いでもしたほうが喜ばれるかな。

やったことないけど、やってみたらなんとかなるかもしれない。草むしりくらいならできそうだし。ほかにできることなさそうだし。

したくないけど。

したくないけど。

……………。

あーくそっ、貧しいながらも慎ましく貯金を切り崩してニートしてたというのに、どうして俺はこんなところでも職がないと悩まなければならんだ！

苛々しながら邪魔な長い髪を掻き毟ったとき、ぐうと腹が鳴った。

あー……、苛々するのは腹が減ってるからかも。

そうだな、まずはご飯だ。サナさんはどこだろう。

俺はゆっくりと伸びをして窓の外を見た。

青い空に、眩い太陽がきらきらと輝いている。いい天気だ。

……あれっ。つか、農家ですよね。

日が昇ると起床なんじゃないでしょうか？
もしかしくなくても、めっちゃくちや寝坊したんじゃないでしょうか。

「ふっ……」

こんなときまでぐっすり眠りこけることができていたとは、さすが俺。

大物過ぎるな、ははははは！

俺はあたふたと足元のサンダルを引っ掴むと、猛ダッシュで部屋を飛び出した。

07：光の粒

「あらまああらまあ！」

「あっ、あの、昨夜からお邪魔しております、安部瑞樹と申します。すみません、お、おはようございます」

「んーまあ！ サナに聞いたったけど、これまた別嬪さんねえー！」

食堂にそーっと顔を出してみると、サナさんを小さくして丸くしたようなおばさんが、目ざとく俺を見つけてくれた。

「どこから来なさったのね？ 生まれは東かねえ？ んま、サラサラ！ こない真っ黒な髪、はじめて見たわぁー！ 綺麗ねえー！」

「はっ、あの、よ、よかったら切ります。差し上げます」

「あらあらまあまあ、あっはっは！」

「ちよっと、お母さん！」

豪快に笑うおばさんの声に気がついたのか、サナさんがやってきてくれた。

俺はホッとして彼女を見る。

おばさんは「ごめっくりねえー！」とニコニコして食堂を出て行った。

「ごめんなさい、ミズキ。騒がしい母親で……」

「い、いえ。とても、その、お元気ですね」

「元気すぎるのよ、まったくもう。お腹すいているでしょ、いま用意するわね」

「す、すみません」

朝食は昨夜のパンとスープに、温野菜と炙った肉まで用意してくれた。

素材の味が生きていていとはこういうことか。

とても美味しく、ぺろりと平らげてしまった。

肉は鶏だろうか。それっぽい味と歯ごたえがしたが、実は力で始まりで終わる生き物だったりしたらちよつと泣く。

「あ、あの、サナさん」

「はい？」

「その、寝坊して、すみませんでした……」

「ええっ!？ いいんですよ、疲れていたでしょう？ もっとゆっくりしててもよかったのに」

「い、いえ、そんなわけには。あの、それで、その……」

「はい？」

「お、わ、私、お金を持ってないので、お礼が……畑のお仕事とか、草むしりくらいなら、なんとか……?」

「え……ええっ!？ あの、ミズキ？ 畑仕事をしたことがあるんですか!？」

「い、いえ、ないです」

「そうですよね」

「その、経験はないですけど……教えてもらえれば、できるかなと……」

「えっと……」

サナさんは困ったように俺を見た。

肉体労働にまったく自信がないことをあっさり見破られてしまったのだろうか。

たしかに俺は平凡な街育ちで、農家がどんな仕事をしてるのかさっぱり知らない。

耕したり種を撒いたり収穫したりするくらいしか思い浮かばない。草むしりはたぶん必要だろうとは思うが、いまはいらない次期なのだろうか。

うーむ、自分でも何かできるかもしれないなんて俺らしくもないことを考えず、大人しくしていればよかったかも。ちと早まったかな。

「それなら、少し私のお手伝いをしてもらってもいいですか？」

「は、はい」

「ふふ、けっこう大変ですから、覚悟しててくださいね」

「は、はい……」

サナさんが悪戯っぽく微笑むのを見て、俺はすでに後悔しはじめていた。

しまった、これは選択肢を誤ったっぽいぞ。どうする。

さっきの朝食あたりでセーブできていれば、いまずぐロードしてやり直すというのに。

何も言わず流されるように無駄飯食らいの居候を決め込めばよかったかなあ……。



サナさんに連れられてやってきたのは、家の隣に続いていた大きな大きな納屋だった。

「これをね、やってしまおうと思うの」

そういつてサナさんは右側に積み重ねられている膨大な量の木箱を示し

た。

サイズはA4くらい、高さは5センチほどだろうか、床から天井までギッシリと重ねられ、1列50個はあるだろう。それが30列ほど並んでいる。

しかも奥行きもけっこうある。どれだけ置いてあるのか検討もつかない。

納屋の中央にある机の上、その右端によせて先ほどの木箱を数箱置くと、サナさんはひとつを手に取り椅子に腰掛けた。

俺も対面の椅子に座るよう促される。

箱の中には、何かの種らしきものがうっすらと敷き詰められていた。

「私はこれに1個ずつ術をかけて左に積んでいくから、10個ずつくらいであちらに移動させて欲しいの。右の分がなくなったら、また持ってきてくれるかしら？」

「は、はい」

俺はコクコクと頷く。

右側の箱の量に圧倒されていて気付かなかったが、左側にも木箱が積んであった。

ようするに納屋の右から机の右、机の左から納屋の左へと移動すればいいだけだな、よしよし。それくらいなら楽勝だ。俺でも出来る。あーよかった。

「よろしくね。さーて、やりますか」

サナさんは気合を入れて箱杵を両手で掴んだ。

俺はじっとその様子を見つめる。

なんだろ、不良の種でも見つけるのかな。こんなにいっぱい大変

だな――

「――甘く大きく、元気に実りますように」

優しい声でサナさんはそっと呟いた。

それと同時に、オレンジ色の小さな光の粒が箱からパツと舞い上がった。

「……………」

え？ あれ？ 何これ。何この光。

俺の動揺に気付かず、サナさんは再び新しい箱を手にとって呟く。

「――甘く大きく、元気に実りますように」

再び舞い上がる、オレンジ色の小さな光。

パツと光って、ふわっと消えるエフェクト。

そう、エフェクト。

まるで魔法のようなエフェクトが――

「さささ、サナさん？」

「ん？」

「こ、これって……」

「ふふふ、うちのお野菜の秘訣です。こうしておくと、丈夫で大きくて美味しい麦に育つの。私の力って少ないから、こんなにちよつとずつしかできないんだけどね。今日は10列くらい終わらせたいな」

「えと、ま、魔法……です、か？」

「あ、そうでした。ミズキにはまだ言ってませんでしたね。私は土属性の魔術士の資格を持っています。と言っても落ちこぼれで、ほとんど植物にしか効果がないんだけど。それも、こんなに小さな箱でないと言っただけでいいんです」

眉尻を下げて苦笑するサナさんをマジマジと見つめる。

魔術士って言った。

土属性って言った。

「ま、魔法……ですよね？」

「ええ、そうですよ」

頷いた。

「……………!!」

うおおおおおおおまじかあああああああああああ!!

魔法きたあああああああああああ!!

俺は音にならない歓声を上げ、感動に拳を震わした。

どうやらこれで中世ヨーロッパなんていう甘い場所ではないことは確定したが、目の前で踊る淡い光に比べたら、それは些細な問題だった。

08：どう見ても魔法です

俺は夢のある話が好きだ。すごく好きだ。

幼い頃から猫型青ロボットが好きだし、果てのない物語に心酔して、読めもしないのに図書室の洋書を片っ端から開いたこともある。最近では自主制作にかまけていて少々ご無沙汰気味ではあるものの、ゲームや漫画などの二次元は生きる糧であり、俺にとってなくてはならないものだ。

しかし二次元と三次元のように、夢と現実とは別物であり、決して交わらないものだ。

たとえ自分の体が女になっていようと、たとえ突然中世ヨーロッパ風の場所にいようと、『魔法』という心弾む出来事が、そんな摩訶不思議な現象が身近に起きるわけがないと。

そう、このときまで俺はまだこの世界をどこか夢うつつのように、どこか人ごとのようにさえ感じていたのだ。

「――甘く大きく、元気に実りますように」

幾度も煌く、いくつものオレンジの光。

パツと光り、すうっと立ち昇って消えていく。

まるでゲームのようなエフェクト。

まるでCGのような魔法の効果。

「――甘く大きく、元気に実りますように」

俺は呆然と、そして陶然と、サナさんの手のひらから繰り出され

る魔法を飽きもせず見つめ続ける。

魔法です。

どう見ても魔法です。本当にありがとうございました。

……いやー、俺って頭固かったんだな。

魔法が本当にあるというだけで、こんなにも衝撃をうけてるんだから。

まいったまいった、あっはっは。

「――甘く大きく、元気に実りますように」

小さな花火のように舞う光。

魔法を浴びた種は、乾燥してしなびていたのに、箱の中で光るたびにふっくら丸まるしたものに変わっていく。すごい。

本当にすごい。

「――甘く大きく、元気に実りますように」

エフェクトの瞬間にそっと手を出させてもらったけど、光に触れても熱くも冷たくもない。

ずっと見ていても飽きない。これはいい。うらやましい。やってみたい。

魔法ってどうやるんだろうか。

修行か、それとも才能が必要なんだろうか。

「……ふう、ちょっと休憩しましょうか」

「は、はい」

サナさんは大きいため息をついた。

魔法を連続で行使するのは、やはり疲れるのだろう。

あらかじめ用意しておいたポットからカップにお茶を注いで、彼女は美味しそうに飲み干した。

「あ、あの、サナさん」

「ん？」

紅茶を薄めたようなそれを俺もちびちびと啜りながら、魔法を見つめている間に湧いてきた疑問をいろいろ口にした。サナさんは嫌な顔せずひとつひとつ教えてくれたので、いつしか俺は知識欲の赴くまま次から次へと質問を浴びせていた。

まとめるとだいたいこうだ。

サナさんは幼い頃からご両親の畑仕事を手伝っていた。

土いじりが好きで、耕したあとの土の感触が特に好きなのだそう
だ。

そうして幾年か経った頃、どうやらサナさんが手を入れた土から生える植物は、どの畑よりも少し大きく、少し美味しく育っている
ようだ。村中で話題になった。これは魔力があるのではないかと。

野菜が大きくなるのはよかったが、実は少し困ったことにもなっていた。

農作物だけではなく、雑草の育ちもよくなってしまう、抜けども
抜けども生えてきたのだ。あの頃は大変だったとサナさんは懐かし
そうに笑った。

髭のおっさんはサナさんを連れて、エールズ領領主のお館がある
エーフェの街に向かった。

街には教会があり、そこには試金石という魔力の有無を確認する

ためのものが常備されていた。

魔力があるものが触れると、その人物が使用できる属性の中で、一番高い値を持つ属性色のエフェクトが発生する。

幼いサナさんが触れると、やはり試金石は小さなオレンジ色の光、土属性の光をキラキラと振りまいた。

属性は全部で6種類。火は赤、水は青、風は緑、光は黄、闇は紫、そして土は橙。

数種類の属性を扱える者から、サナさんのようにほぼ1属性だけ使用できる者など様々だが、光と闇の属性はめったに使い手が現れないのだという。

ちなみに魔力がないものは試金石に触れても何も起きないらしい。まあそういうもんだろう。

俺もいつか、ぜひ触ってみたい。

魔力を持つことが確認されて、年齢が12歳を超えていれば、王都にある王立魔法学園に入学し、3年間学ぶことができる。

稀に高名な魔術師に直接弟子入りする者もいるが、その数は少ないのだそうだ。

学園は無料ではないが、国の補助金制度がある。

魔術士の資格を持って仕事をこなせば容易く返還できるので、平民であっても入学は敷居の高いものではない。

現在、魔力を持つものは2〜300人にひとりと言われている。

産まれたときにはなくても、成長してから魔力が発現することもあるかなりの頻度であるらしい。サナさんもそのひとりだ。

しかし一度試金石に触れて魔力がないと判断された者は、何かしらのが起きない限り、わざわざ再び触ろうとはしない。

よって把握されている魔術士の総数は少なく、国内でも千人に満たない。

サナさんが入学した年はたったの12人しかおらず、しかも位の高い貴族の娘がいてすごく大変だったそうだ。

「学園に入ると、建前上は位階を気にしないでいいっていうことになってるの。けれど卒業してからのことを考えたら、そんなの無理なのよね。しかも私以外の女の子ってみんな貴族だったから、最初は本当に大変だったわ……。でもまあ、そうね、今ではそれもいい思い出よ」

サナさんは砕けた口調で、楽しげに思い出を語ってくれた。

話を聞くにつれ、俺のサナさんに対する緊張はほとんどなくなっていた。

彼女が話している間、まるで優しいお姉さんが宿題を教えてくださいてもいるかのような態度だったからかもしれない。

さすが【癒し系】と【姉】の二大属性は強力だ。

この俺がリアル女性相手でこれほど楽に息ができるとは。

普通にスラスラと、まるでオタ仲間を相手にするように言葉が出てくる。

「サナさんは、卒業したらすぐに傭兵になったんですか？」

「本当は傭兵になる予定はなかったの。ここでこうして、家の手助けをしながら薬を作ったりするつもりだったんだけど、弟とばったり再会して」

「クルークさん？」

「そうそう。成人した年に家を出てね、それ以来ずっと帰ってこなかったのよ。仕送りが何度かあったから、生きていることはわかってたんだけど」

ここでは15歳で男女とも成人らしい。さすがに早い。

俺なんてその年頃は、ちょうど厨二病に罹患して最高潮の時期だ。

若かりし故の過ちを量産してたというのに。

かたや傭兵、かたや黒歴史積み上げ中。なにこの雲泥の差。

「傭兵にも魔術士っているにはいるんだけど、やっぱり少ないの。でも私は土属性だから、あんまり人気なくって……」

「そうなんですか？ 植物が扱えれば、かなり便利だと思うんですけど。食いっぱぐた、食べ物に困ることはないですよ」

「実はそうでもないの。私の力だと、急激に成長させたりするとすごく大味になっちゃって。食べられないことはないって程度の残念な味になるのよね」

「果物を発見して、自給自足とか」

「たぶん相性の問題なんだと思うけど……、私、薬草はすぐに見つけることができる割に、それ以外はあんまりピンとこなくて」

「むしろ薬草のほうがいいじゃないですか。たくさん必要になりそうですし」

「それ単品ですぐに効果のある草なんてあんまりないから、任務中ではほぼ意味がないわ。干したり煎じたり漬けたり調合したり、発酵や熟成をしてその上で魔力を注いだりしないと使い物にならないし。すごく時間がかかるのよね……。もちろん用意はしていくんだけど、そんなにたくさん持ち歩けるものじゃないし……」

あれ、おかしいな。

なんだか言えば言うほど落ち込ませている気がする。ヤバイ。

「でも、お、私がもらった飲み薬、本当にすごい効き目ですよ。だるさがスーッとなくなっ、すぐに楽になりました。あのときはとても助かりました」

「ふふ、それはよかったわ。でも……、ううん、そうよね。時間にかかるけど、私はこの力のおかげで良く効く薬も美味しいお野菜も作れるんだもの。ありがとう、ミズキ。……ごめんね、愚痴聞いて

もらっちゃって」

「いえ、そんな。私が質問攻めにしたのに、すみません」

「ううん。こういう話って傭兵仲間には絶対できないから、聞いてくれて嬉しかったわ。ほんと傭兵稼業はストレス溜まるのよ」

「もういつそのこと、引退してしまえばどうですか？」

「うーん、でも弟を放ってもおけないし」

「えっ。すぐ強そうだし、彼ならひとりでも大丈夫だと……」

「ほら、あの子ってとてもぶっきらぼうに見えるでしょう？ 本当は優しい子なのに」

……あの子？

一瞬誰の話だったかと思っただけど、いやはやさすがに姉は強しだ。あの強面を捕まえてあの子呼ばわりとは……。

「あんな態度だと誤解されやすいから、姉としてはすごく心配なのよ。なのに全然言うこと聞いてくれないの。もう何度も人付き合いが円滑になるための助言をしてるのに、最近じゃその話になると逃げ出すんだから。まったくもう」

「あは、ははは……」

えっと、その助言を聞いたのが俺でもたぶん実行できないと思います、ハイ。

しかしサナさんが実姉というのは、思っていた以上に大変なこともかもしれない。

見ず知らずの俺にこれほど親身になってくれているのだ、おせっかいだろうとは思っていたが、身内に対してはさらに過保護というか、過干渉というか……。

泰然として見えたクルークだけど、けっこう苦労してるんだろうなあ。

俺はしみじみと憐憫の情を抱きながら、相槌を打ちつつお茶の残

りを飲み干した。

09..美味しい麦

おぼさんが「お昼できたわよう！」と呼びに来てくれたとき、俺たちはまだ休憩中だった。

あれからもサナさんは話題を途切らせることなく滔々と喋っていて、少々気圧されながらふんふん頷いていたらしいのか昼になっていたのだ。

起きたのが遅かったので実際はそれほどでもないのかもしれないが、俺にとってはこんなにも長い間誰かと話したのは半年以上ぶりでもある。

いやー、やればできるもんだなあ。

何こいつと蔑む冷たい目や、生ぬるい上から目線がなければ、俺だって女性と会話を続けることくらいできるのだ、はっはっは！

調子に乗りつつ食堂に行ってみると、そこでサナさん、クルーク以外の兄弟と初めて対面することになった。

じっと見つめてくる妹さんと目が合ったので口元を緩めてみたら、少女はさっとおぼさんの後ろに隠れた。

うーむ、怖がられてしまったか。

12歳、いや14歳くらいかな？　ずいぶん気弱そうだなあ。

俺を見て顔を赤くする少年たちと怯える少女を前にして、突き刺さる複数の視線に内心たじろぎながらも、どもることなく自己紹介をした。

完璧だ。俺、いつかリア充にもなれるかも。

でも男としてならともかく、女の身となった今、少年たちの熱い視線の意味に気付いて暗澹たる気分になりました……。

いいか少年よ、いま君たちが見ているのは幻想だ！　虚像だ！

偽者だ！

姿かたちには惑されてはいけない、中の人はお兄さんなんだ！！

……と言うわけにもいかないだろうし、とりあえず徹底的に避けることにしよう、そうしよう……。

それにしても、外人の年齢は見た目じゃ全然わからないなあ。

だいたいサナさんはいくつなんだろうか。

あのクルークの姉なんだし、奴が25は越えてるだろうから、やはり26くらい？

聞いてみたい誘惑に駆られたが、女性の年齢をたずねるのは禁呪のひとつと学んでいる。

やめておこう。わざわざ藪をつつくこともあるまい。

昼食はパン、キャベツと芋とベーコンらしき肉のスープ、野菜炒め、ゆで卵のサラダをいただいた。

食卓に出る野菜はすべてサナさんの下準備を経て育てたものだろうだ。

なるほど、美味しい美味しいと思っていたが、これで謎が解けた。この家が裕福に見えるのは、きっとこの特別製の野菜のおかげだろう。

どの街でも美味いと評判に違いない。

腹ごしらえを済ませ、再び納屋に戻る。

俺たちは午前中のロスを取り戻すべく、せっせと麦の種に取り組んだ。

あまりに多い量だと思ったら、全部が麦ってわけでもなく、奥の列はまた別の種らしい。

しかも村全体で使う種なのだそうだ。

たしかに一軒だけ飛びぬけて美味ければ、ご近所付き合いに影響が出るもんな。

「――甘く大きく、元気に実りますように」

何十回目かの呪文を聞いて、ふと気になった。

「呪文は決まってるんですか？」

「ううん、なんでもいいの。『美味しい麦になりますように』とか。だけど今年は甘みがあって大きくて、災害や病気に強いのがいいっていう要望があったから」

「なるほど」

「要は想像しやすいかどうかよ。こうあってほしいのでお願いします、という感じかしら。――甘く大きく、元気に実りますように」

単純明快だが、だからこそイメージが固定するというのか。

ああ、やってみたい。

でもこれはサナさんの仕事であり、村にとっては生活の糧だ。好奇心で試してみたいなんていうことはさすがにまずいだろう。

俺は積み上がった『美味しい麦になる種』を納屋の左に移動させ、『美味しい麦になる予定の種』を右から机の上に運んだ。

ああ、やってみたいなあ……。

「ミズキは試金石に触れたことあるの？」

「いえ、ないです」

「それじゃ、まだ魔力があるかどうかわからないのね」

「はい」

「だったらやってみる？」

「――え？」

サナさんはっこりしている。

「よかったら試してみたら？」

「え、でも……」

「土属性、それも植物に作用させるには相性が必要と言われているわ。だから上手くいかなくても落ち込まないでね」

「いいんですか？　なんか、かからないならまだしも、変な風になつたりしたら……」

「大丈夫よ。いつも多めに種は用意してあるんだから。気にしないで」

「そ、そうなんですか？　えーと、それじゃあ、ちょっと失礼して……。実はすごくやってみたかったんです」

「ふふっ、そうだと思った」

サナさんは可愛らしくにこっと笑った。

俺もえへっと笑い返した。

いいのだ、今の俺はどうやら美女なんだそうだから、はにかんだつておかしくないはずなのだ。

俺は1箱手にとって、美味しい麦のイメージを試みる。

しかし麦か。穂になってるところ直接みたことないんだよなあ。

うーん。

たとえば……、ビールとか？　でも俺あんまり飲まないからなあ。

うーむ……あ、そうだ。

青い衣をまとして降り立つ金色の野みtainものでどうだろう。つーか米。米みたいなものだな、たぶん。いけるいける。

姫様、王の蟲様、どうぞお力をお貸しください。

金色の美味しい美味しい甘くて大きい元気な麦にしてください。

『――甘く大きく、
元気に実りますように』

10：落ち着いている

目の前に白い光が広がった。

その強い光が、魔法のエフェクトだと気付くのにしばらく時間がかかった。

麦だ。

黄金に色づいた立派な麦だ。

箱からギッシリと太く長い茎が伸び、てっぺんには大きな粒となった麦の穂が重たそうにわっさわっさと揺れている。

……ええと、成功したけどこれ失敗だよな？

魔法で育てたら大味になるんだっけ？ まずいよな。

魔法の行為自体は成功したが、なんだか予想外に斜め上の結果となってしまったので、俺はとても冷静な気分になった。

さっきまであれほどワクテカしていたのに、明らかにテンションがクールダウンしている。

……いや、もっとはっきり言おう。

俺は怖気づいている。

もっとこうさ、何も起きなくてガツクリとか、成功したけど種に変化がなかったとか、せいぜい芽まで出ちゃったぜすげー！ くらい成功とかさ。

そういうものを想像してたんだよね、うん。

「……もう一回やってください」

「えっ？」

「もう一回やってください」

「ハ、ハイ？」

サナさんの顔から一切の表情が抜けていた。
その目は怖いほどに真剣だ。

「お願いします」

「ハ、ハイ……」

なんだか抗えないものがあるので、俺は新しい箱を大人しく受け取った。

今度は失敗しすぎないようにもっとしっかりイメージしよう、そうしよう。

俺は育ちきった麦をちらりと横目で見てカンニングする。

麦そのものがあると想像するの楽でいいな。

えー、今度は種の状態のまま、土に埋めて育ててもらったら、すっごく美味しくて甘くて大きくて、元気いっぱい麦になりますように。

『――甘く大きく、元気に実りますように』

ふわり、と箱からエフェクトが立ち昇る。

それはサナさんのように暖かいオレンジ色ではなく、鮮烈な光を放つ真っ白なエフェクト。

純粹なまでに白い光はキラキラと輝き、柔らかく溶けて消える。
今度はドーンと育つこともなく、箱の中には丸々とした種が残っていた。

俺はホッとしてサナさんに箱を差し出す。

これはどうかな、いい感じっぽいなだけど。

「白……」

サナさんは呆然と呟いた。

「あ、やっぱり白い光は失敗の証とかですか？」

「いいえ。……いいえ、そんなことはございません」

「……えっ？」

あれ？　なんだかサナさんの様子がおかしい。すごくおかしい。ぶるぶると体を震わせて、なぜか涙ぐんで俺を見つめている。

「あなたさまは、神子様みこだったのですね……」

「……………ハイ？」

「属性の6色以外にも、秘められた色が存在するのです。黒い光は魔物の使う属性。そして白は、光と闇の至高神ルヴァインの、原初の御力」

「それって、えーと……」

「神子様のお手を煩わし、あまつさえこのようなあばら家に滞在していただきましたこと、誠に申し訳も……」

「うわああああストップストップー！！」

土下座！！

土下座っぽいこととしたよこの人！！

白いエフェクトってのはそんなに態度ガラッと変わってしまうほどすごいっつかまずいっつかやばいっつか、そういうことか！！？

「サナさんサナさん、俺本っ当に何にもわかってないんですそういうことしないでくださいお願いします、ほんとお願いしますさっき

までのサナさんに戻ってください頼みます」

「ミズキ様……」

「様とかマジ勘弁してくださいお願いしますこの通りです」

手を取って立たせながら、必死になって説き伏せる。

俺の慌てっぷりを少しは不憫に思ってくれたのか、サナさんはようやくもとの椅子に腰掛けてくれた。

あーびびった。超びびった。

リアル土下座とか、俺がするのはともかくされるのはありえねえだろ常識的に考えて！

「そsそうだ、お茶、お茶飲んでくdさい。そsたら落ち着kはずでs」

あー、さっき限界を超えたスピードで喋ったから舌が麻痺ってるぜはっはっは。

俺はポットを奪うとカップに注いで、ずいっとサナさんに差し出した。

自分のカップにもダカダカと淹れて、ぐいーっと一気に飲み干した。

「ふー……」

あー、やっと落ち着いた。落ち着いたったら落ち着いた。

落ち着いたってことにしたら、落ち着いた気分になるはずだ。

俺はいま落ち着いている。

俺はすごく落ち着いている。

大丈夫、落ち着いている。

ヒッヒッフー、ヒッヒッフー。

うむ、よし。

ふー……。

ってかなにこれ、え、どういうこと？

なんか神様の力的な？ 勇者ってか？ いや、神子つつってたな。どっちにしる俺の手に余る度はマックスな単語なわけだが。

魔王でも倒せてか？ 救世主にでもなれてか？ 世直しでもしろってか？

なんかそういうフラグだよなこれ。

うわーかつこいー。

……………。

やばい絶対やばいどうしようどうしよう。
どうすれバインダー！。

11：三下台詞

俺はこの際なので、現状を詳しく、できるだけこと細かくサナさんに説明することにした。

気がついたら突然あの森の池に素っ裸でいたこと。

こことは違う魔法のない世界に住んでいたので、こちらの常識がさっぱりわからないこと。

本当は男だということ。

……こと細かくもなにも、あんまり言うことなかった。

なんせ俺もどうしてここにいいのかわからないから説明のしようがないのだ。

サナさんはじっと俺を見て静かに聞いていた。

さきほどのあのパニック的なものは表情になく、落ち着きを保ってくれているようだ。

でも俺にはわかる。

サナさんは大きな勘違いをしている。間違いない。

「えっと、サナさん？ 別に神様の世界から来たとかじゃないですよ。魔法がないだけで、普通に人が住んでる世界ですから」

「は、はい。……わかっております、決して他言はいたしません」

「いやそうじゃなくて」

そんな押し問答が続けた結果、どうやらサナさんは、俺が本当になにも知らないことだけはわかってくれたらしい。

多少口調が改まって、キリッと居住まいを正してしまっているが、そこはもう諦めることにした。

世界が違うのだからそのあたりの価値観も違うのだろうし、それに俺がもしサナさんの立場だったら、もっと酷い態度を取ったと思うからだ。

ようするにこれはあれだね、オフ会で意気投合した男が、実はさる王家の第一王子だったということが突然発覚した現場みたいなものだよね。

相手の本質はなんら変わってなくて、すごく気の合う相手で、でも会って間もないわけだ。「お前はお前だ、俺たちはさっき友達になった。だからこれからもずっと友達だぜ！」なんていう熱い台詞が似合う場面だね。うん、俺には無理。

ショックを受けて浅ましくねたんだり、遠巻きにして「なんであいつなんだ……」とか三下台詞を口にしてしまいうに決まっている。実際自分だったらパニックになって逃げ出すくせに、選ばれなかったら嫉妬する、懐の小さい男。それが俺なのだ。

だからせつかく打ち解けたはずのサナさんの態度が変わっても何も言えない。

寂しいと感じても、どうしたらいいのかわからない。

様付けはやめて欲しいと頼めばさん付けにしてくれたし、いまもきちんと向き合って話を聞いてくれている。

それだけでも十分のはずだ。そうだろう？

……だけどため息は出ちゃう。男の子だもん。
はああああー……。

「えーと……、ようするに俺は、ちょっと変わった魔力があるってことですよね？」

「ちょっとではありません。至高神に匹敵するほどの御力です」

「あー……。その、俺だけとか、そういう感じですか……？」

「いえ、王都に白の御使い様はいらっしゃいます」

おっ、これはちよつと予想外。

土下座されかけるほど豹変されたりしたし、てっきり俺だけの特殊能力なんだと早とちりしてたよ。やっべ、これはちとこっぱずかしい。フヒヒ。

で、でもこれでほら、勇者フラグは回避できるってことだよな、うんうん。

あーあなーんだ、あーよかった！ 拍子抜け3割、安堵感7割だよまったく！

ぬか喜びしたような胃がキューツと痛くなるような複雑な気分にさせやがってこいつう！

「よかった、他にもいるんですね」

「はい。ミズキさんは、おふたりめの白の御使い様でいらっしゃいます」

……ん？ あれっ？

「えっと、俺入れてたったのふたり？ ですか？」

「はい。王都の御使い様は、神代の時代以来はじめて現れた使い手でいらっしゃると伺っております」

あれ……？

よし同じタイプがいっぱいいるなら平気だろこれでひと安心〜と
か思ったのに、なんか別のフラグが立ってるよねこれ。違う方向に
ヤバそうな感じの。

俺その王都の人の権威を脅かす系ってこと？ え？ なんかそれ

まずくないかな、かな？

「ええと……、その、王都の御使い様は、どういう位の方ですか？
まさか王様、とか？」

「いいえ。王家を守護されている方です。たしか、宮廷魔術師長と親しくしていらっしやると聞いたことはありますが……、御使い様は御使い様、その、神子様ですので、位といいますと……」

「ああ、いいいいんです。それほど詳しく聞きたかったわけじゃないですから」

「つか王家の守護ですって。ははは。

さらに宮廷魔術師長とききましたよ。ははははは。

どう聞いてもすごく偉い人ですよね、わかります。

「サナさんは、王都の御使い様にお会いしたことは？」

「ございません」

「じゃあ噂でどんな性格の方だとかは、聞いたことがあります？」

「とてもお優しく、清廉な方だと」

ははあ、さいですか。

表の顔は優しいけど腹は黒いんですよフフフフってことか、それとも言葉通りなのか、それが問題だ。

「うーん……」

……あれ、待てよ。

白い魔術士の力は、神レベルって言ったよね。

なら、俺ってもののあの部屋に、自分で帰れるんじゃないか……？

……いやいや待て待て早まるな。

そういう次元跳躍的な術には制限がついたりしているのがお約束だ。

時空の狭間とか別の世界にでも出るならまだしも、失敗してバラバラになったりゲル状になったりしたらたまったもんじゃない。

まだ何も魔法形態についてわかってない上に、自分になにができるのかも把握してないんだ。リスクが高すぎるだろう。

とりあえず自力帰還はちょっと置いとくとして。

でも、それがふたりならどうかな。

もうひとりの白の使い手。

王家を守ってたり、宮廷魔術師長とも懇意ってことは、かなりの実力を持っているだろうし、この世界の魔法の構造にも詳しいんじゃないだろうか。

俺はすぐに元の世界に帰りますっていうなら、同属性のよしみで手え貸してくれるんじゃないかな。甘いかな……。

それに衝撃でスルーしてたけど、黒は魔物の使う色だとか言ってた。間違いなく言ってた。

ははは、きたこれモンスター設定。

なんとまあサバイバル必須な世界だったとは。聞いてない、聞いてないよ。

倒して経験値とコインが落ちるなら立派なRPGだね、すごいやーあはははは。

……………。

っーか無理。無理無理絶対無理！

俺はグロは駄目だしスプラッタも駄目だ！

バイオで危険なゾンビゲーをプレイできない男なんだぞ！

それどころかゾンビ絵でさえ目を逸らす男なんだぞ！

一時期いろんなサイトにゾンビがわらわらいる広告画像が貼られてて涙目になってた男だぞ！

ニュースサイトで閲覧注意タグがあれば絶対に開かないんだぞ！怖いもの見たさなんていう単語は俺の辞書には存在しないのだ！そんな俺に、職業傭兵がまかり通ってる世界で生きるなんて無理、絶対無理！ 道歩けない！

「……うーん……」

たしかに魔法は魅力的だ。とても魅力的だ。すごく魅力的だと認めざるを得ない。

しかし代わりにネットもゲームも漫画も小説もアニメもないのだ。俺の愛する彼女たちはすべてあちらの世界の二次元にいる。

それにあっちは家から出なければ基本的に平和だ。どっちなしか選べないというのなら、悩むけどやはり一度あの部屋に戻りたい。桜子と桃子も完成を待っている。俺が命を吹き込まなければ、彼女たちは永遠に闇の中なのだ。

……あーだめだ、帰れないとか、それだけは今考えちゃだめだ。考えちゃだめだ考えちゃだめだ考えちゃだめだ。

やります、僕は帰ります！

よし、帰ろう。

少々後ろ髪を引かれなくもないが、とにかく方針は決まった。まあ帰る方法を見つくるまで、この世界で生きるしかないんだし。その間はめいっぱい魔法を堪能しよう。そうしよう。

方法を探すにしても、なにより金だな。金は絶対に必要だ。

やっぱり魔法で稼ぐのが一番手っ取り早いんだろうなあ。

でも白いエフェクトがバレると神子様（笑）って呼ばれて信仰的

権力強制発動【効果…土下座される】ってなるわけだよね。なにそれ怖い。

だいたい神子ってなんだ。神様の力だからか。

教会とかの偉いさんに捕まったら、救世主っぽく祀り上げられたりするんだろうか。

俺は八百万の神々を正月のたびに崇めているが、宗教とか無縁なんだけど。

ああもう遠慮したい。超遠慮したい。謹んでご遠慮させていただきたい。

「あの、ミズキさん……」

「——っはい。あ、あー……、すみませんサナさん。つい考え込んでしまっただけです」

「そんな、思索のお邪魔をして申し……」

「いえいえいえありがとうございます。ドツボにはまってたところですよ」

俺がぎこちなく笑うと、サナさんも微笑んでくれた。よかった。

やっぱりひとりで悩んでいても埒があかないな。

だいたい俺の脳はこういう小難しいことを考えるのに向いていないのだ。

ここは素直に現場の意見を聞くべきだろう。そうしよう。

「えーとサナさん。そうですね、こちらでも魔法が使えたりして素敵などところだとは思いますが、できればその、元の世界に戻りたいんです。でもその方法がわからなくて……方法を知るまで生活するにしてもお金がないし、この力で稼ぐにしても、白だつて知られたらやっぱり神子様扱いなんですよ？ それはちょっと困……あ、いや、どうもそういう扱い慣れてないだけですから、謝らないでくださいサナさんサナさん頭上げてください」

サナさんの顔がくしゃっと歪んだので、俺は慌ててフォローする。
あぶないあぶない、難しいなあ会話って。俺もういっぱいはいだよ……。

「うーん……あ、魔法って使ったら必ずパツて光りますか？」

「はい」

「あー、じゃあこっそりできないですね……」

くそっ、いい案だと思ったのに。

「ミズキさんは、もともといらした世界に帰る方法をお知りになりたいんですね」

「はい、そうです」

「でしたら、王都をお勧めいたします」

「王都ですか？」

「はい。学園にも高度な書物はたくさんありましたし、王立図書館もあります。高名な魔術師もたくさんおります。きっとミズキさんの力になってくれると思います」

「なるほど……」

力を貸してくれるかどうかは怪しいけど、その図書館はちょっと興味あるなあ。

それに俺のことだから、どうせ隠していたって簡単にピンチになってあっさり使ってバレそうだし。

結局そうなるのなら、最初から一番やばそうなところを目指したほうがむしろ手っ取り早いかもしれない。

虎穴に入らずんば虎子を得ずとも言うしな。

うん、じゃあもうそれでいいや。そうしようそうしよう。

「えっと、それじゃ王都に行こうかなと思うんですけど、その……サナさんには大変申し訳ないんですが、あの、もうしばらく、力を貸していただけると……」

「はい、もちろんです」

即答だ。なんて頼もしいんだ。

俺は深く頭を下げた。

「すみません。よろしく願います」

「そんな、ミズキ様、いえ、ミズキさん、やめてください」

「本当にありがとうございます」

万感の思いを込めてお礼を言った。それしか今の俺にできることなんてないからだ。

サナさんはオロオロして俺の頭を上げさせようと手を差し出した。俺がその手を取っても彼女は振り払わなかったので、軽く握った。暖かった。

サナさんは俺を森で拾っただけで、別に何の義理もないのに面倒をみってくれる優しい人だ。

だからこそ、その優しさに付け込んでしまった罪悪感があった。頭などいくら下げても下げ足りない。

帰るために利用するようで大変心苦しいが、今の俺では何をするにしてもサナさんの助力がないと難しい。

とりあえずは、サナさんに魔法を教えてもらいつつ、王都を目指してみよう。

別に白属性だからって迫害されるわけじゃないっぽいし、なんとかなるんじゃないかな。なってほしいな。なってくださいお願いします。

12：甲斐性はない

そうと決めたら早かった——ということにはならなかった。

なんたって種の作業がまだ途中だ。

サナさんはすぐにも出発したほうがいいと言ってくれたが、大事な村の生活の糧を、俺のために途中で放り投げられても困る。

今年の出来はイマイチだったとか、そんなブランド価値を下げるようなことさせられない。

別に急いでないからサナさんの仕事が終わるまで待つし、俺の魔法でもよかったら手伝うとも言ったのだが、そうすると今度は『神子様』をおもてなしするには、この村では難しいというような話になった。勘弁してくれ。

しかし俺のことは気にするなといっても、そういうわけにもいかないのだろう気持ちはわからなくもない。

下手にその心情がわかってしまうだけにいただけない。

そういうときは偉い人が強引に「私はここがいいの！　しのこの言わないでここに泊めてちょうだい！」ってやってくれたら、俺なら「は、そ、そうですか……なら……」と恐縮しつつも安心してうやむやになる。

よし、この手でいこう。

「あの、俺はサナさんのお宅が好きですし、ご飯美味しいし、また泊めていただけたら嬉し……」

「滅相もございません！　一度ならず二度までも、このようなあばら家にお泊めするなんて、そんな恐れ多いこと……！」

俺には無理でした、はい。

ならば紹介状でも書いてもらって、ひとりで出発する——わけがない。

そんな無謀な選択肢は浮かんだそばから却下だ。消去だ。ボツシユートだ。

いいか、俺にそんな甲斐性はない！ キリッ。

すぐに出発したほうがいいというサナさんと、終わるまで待つという俺。

お互い下手に出ながらも引かないので、なんだかグダグダである。しかも元々サナさんは面倒見のよいお姉さん気質だ。その性格はアドバンテージが高い。

俺の敗色がだんだん見えてきた。ヤバイ。

そこで俺はピーンときた。

サナさんが一番適任だし俺も助かるとはいえ、なにも必ず彼女に連れてってもらわなくてもいいのだと。

別の人に頼めばいいのだ、たとえばクルークとか。

正直奴はおっかないが、この際贅沢は言わない。それくらいは耐えよう。我慢しよう。

その提案に最初サナさんは渋った。

けれどこの世界の移動は馬だと聞いている。俺は慣れていないので進む速度はすぐくゆっくりになるだろう。とかゆっくりでなければ困る、絶対無理だと強調し、休憩も多く取ってもらうことになるから、サナさんの仕事が終わる次第追いかけてきてもらえば途中で合流できるだろうと訴えることにより、なんとか最終的な合意に至った。

ふはははは勝った勝った。あー危なかった。

畑を手伝っていたクルークを引きずってきたサナさんは、事情を簡単に説明した。

クルークは俺が神子様（笑）で男だという事実には軽く目を見張ったものの、王都に行くことをあっさりと了承してくれた。

まだ十分に陽は高いので、出発するのに支障はないらしい。ふたりはさっそく準備に走った。

サナさんは手早く俺用の旅道具を整えてくれた。

衣服や食料、細々とした道具、水袋、サナさんの作った様々な薬。それにお金。

小さな金貨を1枚、これはコルセットの間に挟むようにと渡された。

他にも数種類の銀貨や銅貨などどっさりくれた。

こんなにもらっていいんだろうかと思いつつも、何があるかわからないので素直に受け取った。

ここは甘えさせてもらおう。

いずれ……、いや、なんでもない。俺にそんな甲斐性はry

硬貨がたくさん入った袋はずっしりとして重かった。

価値もわからないし、これはクルークに持ってもらうことにしよう。

馬に乗るので、サナさんの乗馬用ズボンももらった。長い。

これは決して俺の脚が短いわけではない、彼女の背が高いのだ。

誰にともなく言い訳しつつ余分な裾を折り曲げていると、明るい色のローブも差し出された。先日サナさんが着ていたものに似ている。

羽織ってみるとやはり長かった。彼女の身長は俺より15センチは高いので、そのぶんいろいろ余るのだ。

「あーその、お気持ちだけいただきます……」
「すみません、ちょっと大きかったみたいです」

ハロウィンの幽霊^{ゴースト}のような俺を見て、サナさんはかすかに微笑んだ。笑みを浮かべてくれたことにホッとして、俺も笑った。
クルークのマントは丈がちょうど膝上にきて動きやすい。そう言うのとあっさりもらえた。

深いカーキ色をした丈夫な皮製で、それなりに高そうな代物だけどいいのかな。まあいいことにしておこう。

準備が完了し、畑仕事をしていたサナさんのご両親にお礼を言って、にこやかな挨拶とぎこちない挨拶を受けた俺は、そこで問題に突き当たった。

馬だ。

栗毛の馬はつぶらな瞳がとても愛らしいのに、体軀は隆々としていて想像以上に大きい。

女の体となって身長も縮んだ俺から見ると、でかい。すげーでかい。思っていた以上にでかい。え、馬ってこんなでっかかったっけ？
でかいものは怖い。馬の背から落ちたらすごく痛いに違いない。

まあようするに、乗りたくない。

そうだ、歩けばいいと思うんだ。俺には自分のものとは思えないスラリとした立派な足が2本もあるじゃないか。うんうん。

俺が竦んだのがわかったのだろう、サナさんは安心させるように微笑んだ。

「こう見えても、弟は馬の扱いが上手なので大丈夫です」

弟は大丈夫でも、俺はまったく大丈夫じゃない。

しかし、街道の街に今日中に着くには馬に乗るしかないらしい。
それも初めてなら背中は大変なからと、クルークの胸の前に抱え
られるように座れと。

ははは。ははははは。

頼んだぞクルーク。くれぐれも安全運転でよろしく頼む。

だからゆっくりでいいからゆっくりで。

速いと痛い、怖い、痛い、尻が痛いって！

13..銀盆

日が落ちる頃、ようやく街道沿いの街エーフェに着いた俺はすでにグロッキーだった。

きっと俺は一生馬の揺れに慣れることはないだろう。

ただでさえ子供の頃はバスに酔いまくっていた。

そんな俺がサスペンションのない乗り物になど耐えられるわけなかったのだ……。

「大丈夫ですか」

「そ、そう、見え、ますか……」

「見えません。すみません」

宿屋のベッドに撃沈している俺に、クルークは飄々と言った。

こいつは言葉自体は丁寧だけど、すぐく淡々と力の抜けた喋り方をする。特に敬っている感じはない。まったくくない。

俺の鋭敏な嘲笑センサーが反応していないから、馬鹿にしているわけでもなさそうだしいいんだけど……いいややっぱりよくない。全然よくない。むしろ敬ってへつらえ。お前はそれくらいでちょうどよさそうだ。

だってこいつ嫌だっつってんのに馬走らせたんだぞ。パカポコじやなくてダカッダカッてすんげー音すんの。超怖い。

速いし痛いし怖いし辛いしもう嫌だ止めて降ろしてくれと懇願したのに総スルー。

あーあー聞こえないとばかりにまるっと綺麗に全スルー。

最初に一言「話すと舌を噛みます。黙っていてください」のみな

んだぞ。ふざけんな氏ね。そんなこと言われたら黙るに決まってるだろボケが。くそつ。

まったくサナさんの弟とは思えないほど傍若無人だ。やっぱりサナさんと来ればよかった。意地でもあの村に残ればよかった。ほんとにどうしてこうなった。

まあ、彼女のあの下にも置かないおもてなし状態はけっこう精神的ダメージが大きかったので、このニュートラルな対応は気持ち的には楽なんだけども……。

でもこの姉弟は足して2で割ったほうがいい。絶対そのほうがいい。

しかも俺、うまれてはじめてお姫様抱っこされたんだぜーあははははは。

宿のおっちゃんの視線が痛い何の。

いいよもう、実際にま歩くことなんてできやしないし、女の姿なわけだし。

気にしたら負けなんだ、きっとそうなんだ。男のプライドがなんだ。

歩かなくてすんでよかったじゃないか。そうだそうだ、そういうことにしておこう。

とにかく乗馬は半端なかった。

尻も足も腕も背中も痛い。体中どこもかしこもじんじん痛い。

内臓もひっくり返ってるのでうつ伏せになって腹を抱えていると、クルークが横から木製の筒を差し出してきた。

例のサナさん特製飲み薬だ。

そうだ、俺にはこの頼もしい味方があったのだ。

震える手でそれを受け取り、劇的に効果がある液体を俺はゆっくり啜った。

味は少し苦いが、ハーブ風味が爽やかで飲みやすい。

「おお……」

一口飲んだだけで、ぐるんぐるんしていた内臓がスーッと元の位置に戻っていく感じがする。ブラボー！　ハラショー！

マジすごい。これはエリクサーと名付けよう。

俺はゴクゴクと飲みそうになったところでハッとした。慌てて筒を遠ざける。

これから先を考えると、できるだけ節約しないとな。

たしか普通に行くと5日くらいかかるって言ってたもんな……。

「あの、あと5日で着くんですよね？」

「……いえ、15日ほどです」

「えっ。……ええっ！？　じゅ、じゅうご！？　15日ですか！

？」

「はい」

じゅう……ごにち、だと……？

なんてことだ、俺は聞き間違えていたのか、そうなのか。

あと15回。

あと15回もお馬さんに乗るんだって。わーい。

もういやだ。もうこの街で暮らす。もう帰れなくてもいい。どうにでもなーれ。

あー、魔法でビューンと飛べたりできないかな。できるんじゃないかな。できたらいいのに。

でもサナさんと約束したしなあ、使わないって。

白いエフェクトは目立つし、何より魔力が大きすぎるらしいので、

下手に使うとどうなるかわからないから、合流してきちんと習うまでは自粛することにしたのだ。

でも俺のゆるい自制心ではあっさり破ってしまいそうだけど。

だって馬もういやだ。もう乗りたくない。

馬に乗らなくてすむというのなら、誰に何がバレてももうかまわない気がしてきた。嘘だけど。

「……おっと」

エリクサーを倒しそうになって俺は慌てて掴み、そして気が付いた。

そうだ、明日からはこの筒をずっと胸に抱えておけばいいんだ！で、気持ち悪くなったら飲む。痛みも取れるはずだ。うん、そうだそれがいい。

しかし走りながらだと、ストローでもない限り飲めないだろうな。あっても飲めるか疑問だけど、そこは試してみるしかないだろう。

「あの、ストローってありますか。こう、穴が開いてて細くて長い筒状で、これを飲むのに使えるような」

「ああ……、調達してきます」

「あ、お、お願いします」

クルークが部屋を出て行ったので、俺はホッと息をついた。

だってあいつ傭兵なんだぞ。それもサナさんと違って完全肉体派の前衛だぞ。

見た目はそんなにゴツくないのに、胸や腕の筋肉の硬いこと硬いこと。

怖い。怖すぎる。俺なんて一捻りだ。

サナさんの弟だと思えばこそ話せるのであって、あれ初対面でクルークだけだったら俺は逃げてたね。

裸だろうがなんだろうが、全力で逃げていた自信がある。すぐに足がもつれて捕まっただろうけど。

「ふう……」

ベッドはシートも綺麗で柔らかくて気持ちがいい。ふかふかしている。

部屋はいわゆるツインだ。壁際にひとつずつベッドが配置され、中央に華奢な衝立がある。

机やチェストも蔓草のような彫り物がされていて高級感が漂っている。

アンティーク調の外国のホテルですと言われたら納得できるほど、現代のものと比べても遜色がない。かなりのグレードアップだ。

やはりこれって神子様（笑）のためということなんだろうか。

俺なんかのためにもったいないことさせてとは思うけど、板のベッドに布が一枚なんてところだったら、絶対眠れないに決まっているので正直助かった。

低反発マットに慣れた体を舐めるなよ。畳でゴロ寝も受け付けないんだぞ。

サイドにある丸テーブルにはカップと水差しらしきものが乗っていた。銀細工だろうか、とても高そうだ。

薬の苦味が少々喉にはりついていてるので、ちよっともらおうと俺はカップを手を取った。

「——こ、これは！」

映っている。

水差しにも、カップにも、その下の銀盆にも女の姿が映っている。俺は慌てて楕円の盆を取り上げ、目の前に翳した。

「な……」

銀盆は傷ひとつなくピカピカに磨かれているため、俺の姿をくつきりと映し出していた。

艶やかな黒髪に縁取られた小作りの顔の中、黒々とした大きな瞳が見開いて俺を見ている。ぐると縁取る睫毛も影を落とすほど長い。

心持ち上がっている目尻がすこし勝気そうな印象を与え、鼻は高すぎず低すぎず、すっと通っていて邪魔にならない。

ほんのりとわずかにしか色付いていない頬とは対照的に、小さな唇は赤く、驚きにぽかんと開いている。

なんということだ。

これは美女ではない。

美少女だ。

どう見ても18歳以上には見えない。

まるで二次元から抜け出したような完璧な容貌だ。

これで素直クールであれば非の打ち所など一切ない、まさに俺の理想の和風美少女像がそこにあった。

「……はかま袴」

そうだ袴だ！

赤袴を持ってこい！

「これは巫女装束を着せないと駄目だろうがー！！」

なんてことだ、この世界に着物はあるのか!?　ありえるのか!?
いや待て、待てよ。そうだ、なければ作ればいいのだ!

手の込んだ着物は無理でも、無地ならなんとかなるだろう。和服は平面的なものだし、それほど難しくはないはずだ。

袴は少し手がかかりそうだが、大丈夫。大丈夫だ。俺には絵心がある。

つい先日まで描きまくっていた。そう、はいからさん時代の桜子と桃子をな!

構造は把握している。型紙くらい描けるはずだ。もちろん一発では無理だろうが、何度か挑戦すれば完成させる自信がある。

完成したあかつきには、白いエフェクトを纏い、巫女装束を着た素直クールな和風美少女の出来上がりだ。

……いい。

いい!　すごくいい!!

「よしっ!!」

「……元気になったようですね」

藁の束を持って戻ってきたクルークに、両の拳を握って力いっぱい上下に振っているところを見られた。

まあいいじゃないか、美少女だ。

そんな仕草もきつと可愛だろう。むしろ俺が見たい。

あーくそっ、全身が見たい!　姿見はどこだ!　どうしたら手に入るんだ!

14..上向き修正

俺はいま猛烈に感動している。

今朝宿を出たら、昨日乗ってきた馬に荷台がついて、幌付きの馬車になっていたのだ。

中には藁がたくさん敷き詰めてあり、その上にシートが敷かれている。

俺が感動に打ち震えている間にクルークは黙々と出発準備を整え、こっちを見てひとつ頷いた。乗ってもいいということだろう。

「あの、クルークさん」

「はい」

「馬車、ありがとうございます」

俺が頭を下げると、クルークは目元だけ緩めるようにしてかすかに微笑んだ。

彼は無骨な強面なのであまりサナさんに似てないなあと思っていたが、その表情は姉を髣髴とさせるに十分だった。

「横になっていれば楽かと思えます」

「はい。ありがとうございます」

いやはや、まさか本当にサナさんの言っていたとおり、気の利く優しい人柄だったとは。その堅物っぽい外見からは想像できないっつーの。

昨日のあの強行突破はいいなんだったんだ。まさか宿か、宿

に間に合わせるためだけだったのか。まあすごくいい宿だったけどさ。

そういやストローも持ってきてくれたんだよな。しかもホットミルクまで持ってきてくれたんだよ。

なんだ、実は本当にいい奴だったのか。さすがサナさんの弟なだけあるな。うん見直した。

俺はあっさりとクルークの評価を上向きに修正した。

馬の背に乗らなくてよくなったので、どん底だった気分がすっきりと晴れ、晴れすぎて少しハイになってきた。わけもなく楽しい気分だ。ふんふんふん、あはははは、あはははははははは。

クルークは俺が荷台に納まったのを確認すると、御者席に回った。ガタンガタンとゆっくり動き出す馬車。

昨日ほどのスピードはなく、まあそれでもガタゴト揺れるには揺れるが、馬に比べたら全然マシだ。素晴らしい。俺は安心して横になった。

寝そべりながら荷物を引き寄せて、小さな地図を取り出した。昨日は慌てて出発したし、宿ではいつのまにか寝落ちしてたのでまだちゃんと見ていなかったのだ。

地図にはミミズがのたくったような文字で、でかかど『ヴィノグランド王国』と書いてある。

そう、俺は話せるだけでなく文字も読めた。読めてしまった。ふっ。もう何が起きても驚かないさ。

……嘘です。ああ驚いたさ、驚いたとも！

宿屋の看板のミミズが『エルラータ』と屋号を表していることに気付いたときは衝撃が走ったが、なるほどこれがバイリンガル気分というものかと自分を納得させることに成功しただけだ。

言葉がわかるから文字がわからなくても本は誰かに読んでもらえばすむなー、とか一応考えていたのにそれも必要なくなった。

なんにしろ読めて困ることはない。むしろ大歓迎だ。なので深く考えないことにしている。

あれだ、車の構造がわからなくとも走らせることができるのと一緒ってことだろう。ちよつと違うような気もするが、まあそういうことにしておこう。

ヴィノグラード王国は、東西は他国に隣接し、北は山脈、南は海に面している。

サナさんたちの村エポは、南西寄りのはずれにあった。

エーフェの街から、街道に沿って北に向かえば王都ヴィノグラシアに辿り着くようになっていた。

街はあちこちに点在していて、しかも街道はそれらを全部繋いでいるため、安全だがけっこう遠回りだ。

ぐねぐねと曲がる網目のような街道よりも、直線の多い山道を行けば近道ができるが、その分危険も多い。

街道沿いは開かれていて、騎士団による巡視もあるらしい。だからめったに魔物や盗賊が出没することはないが、一步森に入ればそれぞれに縄張りがあって、いろんなものがうろろしているのだそう。

小さな森の魔物は弱く数も少ないけれど、大きくて山深いところは凶暴凶悪な魔物も多数棲んでいるらしい。

村や街を魔物が襲うことはあまりないが、万が一のときは中央にある狼煙台で狼煙を上げれば、すぐに領所属の騎士団が駆けつけてくるというので安心だ。

「あの、ちなみにエポ村の森に、魔物は……?」

「いますが大丈夫です。すごく弱いので」

なんだそうか、よかったよかった……などと思うわけがない。
馬鹿め、それはお前の基準だろうが！

もしあの水辺で魔物とエンカウントしていたら、魔法の存在を知らなかった俺なんか水色のグミに似た粘体にさえ瞬殺されたに決まってる！

あー危なかった。出会ったのがサナさんたちで本っ当によかった。
。



馬車になってからというものの、待望のカップカッポというゆったりした馬の足音を響かせて、俺たちはとてもものんびりと進んでいる。日中はもらった藁のストローというか、藁そのものを木筒に挿してちびりちびりとエリクサーを舐めつつ、俺に似合う衣装や台詞を考えたり、これから先どうなるのか鬱になってみたり、魔法でどんなことができるのか思いを馳せたり、昼寝したり、クルークに質問を浴びせたりしながら天井の幌を眺めて過ごした。

昼食は前日に街で買っておいた弾力のあるパンとチーズ、果物を馬車の中で食べた。

おやつには干し肉やドライフルーツを齧る。

エポの村から持ってきた干し肉は味付けが絶妙で、噛めば噛むほど旨みが口に広がってたまらない。

うーん美味しいなあ。ちよつと酒が飲みたいなあ。

しかし二重の意味で酔いそうなので我慢した。俺はあまり酒に強くないのだ。

干し肉はきっちり15等分にしておいた。毎日の楽しみとして少

しずつ食べている。

夜は陽が落ちる前に隣の街に入り、簡単な買い物をして宿を取る。買い物をするというクルークにくつついていったので、お金の価値もだいたいわかった。

種類がいろいろあるので面倒だが、まあ四角い銅貨だと1枚100円前後ってところだろう。穴の空いた丸い銅貨は20円ってところか。

銀貨も丸くて小さいのと四角いちょっと大きいものがあり、宿は四角い銀貨を5、6枚は取られる。なんとなく高い気がする。

宿は毎度相部屋だが、変な気詰まりはない。

クルークに俺が男なんだということは話してあるし、たぶん理解してくれているのだろう。

眼光が鋭いので目を合わせるのは怖いが、その瞳の中に欲望らしいものは全然見えない。俺を女と認識しているとはとても思えない。たんにむつつりなのかもしれないが、それにしただって変化がなさすぎる。

もし俺が男だということには半信半疑だったとしても、女の趣味が俺とは合わないのだろう。よかった。本当によかった。

体を洗うときは、何を言うでもなく用意だけして部屋を出て行ってくれる。

さすがに俺もこのナイスバディを見せるのは忍びないし、何が引き金になるかわからんで無意味に煽ったりなどしない。

奴にその気がなくてもまずかろう。最悪その気になられたらそこで試合終了ですよ。神の力とやらを使ってこの世界を滅ぼしてやるわ、あーっはっはっは！

いいか、やると言ったら俺はやるからな。だから変な気を起こさないでね。お願い。

もともと俺は自意識が大変過剰なほうだ。

なのでサナさんの幼い弟たちのようにはつきりとしたものでも、そういう視線はほぼ気付くだろうという変な自信がある。

女共が俺をそういう目で見た過去はないのでそっち方面はわからないが、男が女を見る目の違いくらいは俺だってわかる。

あれだ、同志が祭典コミケなどで嫁候補を物色しているときの目だろ。わからないでか。

実際問題、ことこの件に関しては自意識過剰だとも言い切れないのだ。

街を歩くとけっこうあからさまにジロジロと見られたりもしている。

好奇心や賞賛の眼差しと、下卑た目はやはり違うなとしみじみ思う。俺も気をつけよう。

コソコソ生きてきた俺にとって、人に見つめられるのはまったくいい気はしないし正直ビクつくが、仕方がないと諦めた。

なんと言ってもこのあたりにはいない、いや日本にもいないほどとびっきりの和風美少女だ。

見るなというほうが無理だろう。俺も見たい。遠くからそっと眺めたい。できれば竹箒を持って境内を掃いているところを、参拝客のフリをして横目に眺めたい。このときは巫女装束でもいいが、セーラー服でもいい。スカーフは赤い旧型のちよつとやぼったいタイプで頼む。スカート丈は膝小僧が半分隠れる程度で、紺のハイソックスははずせない。動くたびにスカートが翻り、白く浮き上がる膝が全部見えるようになるのがいいのだ。太ももの絶対領域のエロさには適わないが、ちらちら見え隠れする膝と、膝裏から続く太ももへのラインを夢想させる喜びはまた代えがたいものだ。ドゥフフフ。

いまのところ、俺はどこに行くにもクルークがそばにいるので、特に誰も近寄っては来ない。彼はすばらしい番犬だ。

しかしどこの街にもチンピラっぽいのはいて、粘っこい毒電波を投げてくるのでゾッとする。

この娘はそんな卑猥な想像をして楽しむものではないということはどうしてわからんのだ！

二次も三次も関係ない、男はどの次元だろうが断固としてお断りだ！ 氏ねじゃなくて死ね！ 絶滅しろ！

ちなみに俺はまだ自分の体をじっくり見たり弄ったりしたことはない。

乳を揉むことはたまにあるが、決してエロスの要素はない。手触りのいい枕を抱きしめるようなもんだ。

嘘じゃないぞ、本当だ。まぎれもなく真実だ。このカシオミニを賭けてもいい。信じてくれ。

まあ、1%もないかと問われるとそれはそれこれはこれだ。人とは得てして矛盾を孕む生き物なのだ。

それにこちらの世界に来てからというものの、そういう男としての切実な欲望がほとんど湧き上がってこなくなった。

女の体だということが、脳にまで影響を与えているのだろうか。

もとから三次元に興味はないどころか、大人なビデオに嫌悪感を覚えてしまう思春期続行中の俺だ。生々しいものは苦手だし現状に不満はない。性欲減退くらいはなんでもない。ただ現在はなんでもないが、どうしよう元に戻って勃たな……いや、そんなことないよね。きつとそんなことはないさあはははは。

自分の姿が理想の美少女だとわかってからは、さらに手を出せなくなった。聖域を汚すなどもってのほかだ。この娘はそんなハレン

ちな性格設定では駄目だ。

たとえばそうだな、いつもクールに落ち着いているが、しかし言動は素直で裏表がない。心根は貞淑で無垢で清らかだが天然ではなく空気を読める。人の価値観をそれはそれと認めつつも、自らを慰めることなど恥じらいと罪悪感で実行できるはずもなく、好きな男（この場合もちろん俺）と手を繋ぐことさえためらい、ファーストキスはプロポーズで、式の晩が初めての夜……そんな感じにピュアピュアした生き物でいて欲しいのだ。まさに夢と理想を立体化した俺の嫁。素晴らしい。

問題はそれが俺の嫁でありながら、俺自身であるということだ。まったくどうしてくれよう。どうしたらいいかなあ。うーん。

15…フラグの立て方

エポの村を出発して6日目。

俺たちは西と南、そして北への街道が交わる主要拠点のひとつ、カーファイ領カーティスの街に到着した。

カーティスの街は、今まで訪れたどの街よりも大きかった。

屋台通りと商店街が区別されていて、建物は石造りのものと木造のものが半々だ。

店がズラリと軒を連ねているようすは、なんとなく好奇心を刺激される。

街の人たちもそういう気持ちが湧くのだろうか、なんだか今日はやけに突き刺さる視線が多い。

俺を見ずに街を見る。ええいジロジロ見るな。俺は見世物じゃないぞ、しっしっ。

「――あっ！」

明日の昼食用にとパンやハムなどを購入した帰り道、クルークの影に隠れてキョロキョロと街を物色しながら歩いていた俺は、横の道筋にずっと探していた小さな看板を見つけた。

「クルークさん、あれは本屋ですか！」

「寄りますか」

「寄りたいです！」

勢い込んで言うと、クルークは頷いて道を曲がった。俺はスキッ

プでもするような軽い足取りでその後に行く。

だって本屋だ、本屋さんですよ！　ねんがんのほんやをしかいに
いれた！　すごいぞ、本屋は本当にあったんだ！　イヤッホー！
これまでの街で一軒も見かけなかったから、じんわり不安になっ
てきたところだったんだよね。あーよかった、聖地はこの世界にも
ある、まだ大丈夫、大丈夫だ。さあいざゆかん二次元の入り口へ！
俺は軽く興奮しながら、重厚な造りの扉をそっと押し開いた。

「……………」

書店は小さかった。

こんなに大きな街にあるというのに、とてもとても小さかった。
なんだこの狭さは！　ド田舎にあるジジババの道楽的文房具屋兼
本屋などというレベルじゃねーぞ！

店内は無駄に高そうな焦げ茶の棚が3つ壁に沿って並んでおり、
本は表紙をこちらに向けて1冊ずつ陳列されていた。数の少なさが
一目瞭然だ。

本には十字型にリボンがきつく結ばれていて、中が読めないよう
になっている。

くそっ、こんなに少なくせに立ち読み防止機能は普及してるの
か。

題名から察するに、宗教や歴史、啓蒙的な内容と推測できるもの
が多く、小説らしきものは1冊だけ、漫画にいたっては当然なかつ
た。

いやわかったた。わかったたよ？

わかってはいたけれど、自分の目で見えるまではとわずかな希望を
捨てることできなかったただけなんだ。

それにこんなにも本が流通してないなんて、思いたくもなかった

んだ。

ああ、やはりこっち世界で心弾む創作物語に出会うことは有り得ないのか……あああ……。

魔術の本も1冊だけ置いてあった。

その名も『魔術指南書』。大変わかりやすい。

表紙には炎の絵が大きく描かれている。

しかしえらく薄いな。まるで装丁だけが派手なB5判サイズ本文24ページ並の同人誌のようだ。

「クルークさん、これおいくらですか」

「5銀貨です」

「……えっ？」

「5銀貨です」

なん……だと……？

これが、この薄っぺらい同人誌もどきが、5銀貨だと！？

「青の紐は5銀貨^{リン}、茶色の紐は8銀貨^{リン}、黄の紐は1角銀貨^{リアス}です」

この数日で、丸い銀貨はだいたい千円前後、四角い銀貨は10倍の1万円前後と学んでいる。

ようするに約5千円、8千円、1万円。

『魔術指南書』に結ばれたリボンの色は青。だから5銀貨。約5千円。

俺は呆然と同人誌もどきを見下ろした。

いくら専門書といえども高い、高すぎる。

角からチラリと中を覗こうにも、表紙裏表紙はしっかりと硬い厚

い紙が使われていてビクともしない。盗み見対策まで万全に過ぎる
とはこれいかに。もうすこしお客に優しくてもいいと思うんだ。あ
らすじもないのにこれはないんじゃないかなあ。くっ、リボンも固
結びとはけしからん。

店員さんがじっと見ているのでこれ以上ご無体もできない。俺は
とうとう諦めて本を棚に戻した。

すべて養ってもらっている身では、この値段はさすがに厳しい。
この街だと宿代は7角銀貨万円もする。それだけでも肩身がせまいの
に、本まで買ってくれとはさすがに言えない。

丸銀貨1枚千円くらいならねだったが、その5倍となると無理だ。し
かもこんなにペラいのだ。

「はあ……。出ましようか」

「はい」

クルークは頷いて、自然な動作で『魔術指南書』を手に取ると店
員に硬貨を渡した。

店員は微笑んで頭を下げる。

「えっ……」

「ありがとうございます、またのお越しを」

ニコニコと営業スマイルを浮かべる店員に見送られた俺の手に、
ぽんと渡された薄い本。

「……えっ？」

俺、いつのまにか本音と建前を間違えて口走ってた？
いや、買ってほしいとは思ったがまだ何も言わなかったはずだ。

「クルークさん、これ……」

「それだけでよかったですか」

「……これがリア充の手口というものか」

「は？」

「いえ、あの、はい。ありがとうございます。これ欲しかったんです」

ペコペコ頭を下げる俺に、クルークは軽く頷くだけ。恩に着せる様子は一切ない。

なんということだ。こいつ、できる！

好みでもない女だか男だかわからんやつのために高価な本をあつさりプレゼントするなんて、俺には到底真似できない。

クルークの態度は相変わらず近所の子をお守りしてるくらいの軽さだし、別に俺が神子様（笑）だから氣を使ったというわけでもなさそうだ。ようするに大変普通だ。自然体でこういうことをやってのけるのだ。

そうか、リア充とはこのような日々の積み重ねがものを言うんだな。そうかそうかそういふことか、なるほどなあ。

俺は本を買ってもらえた嬉しさと、それと同じくらいの衝撃を受けつつフラグの立て方を学んだ。

とはいえ自分で実践することはまずないだろう。金のかかる三元など論外、それが俺のポリシー。



宿への帰り道、しっかりと本を胸に抱きワクテカしながら歩いて

いた俺の前方を、クルークがスッと遮った。
疑問に思ったのと同時に、通りの向こうから声をかけてくる男がいた。

「おっ、クルーク！　なんだお前、戻ってたのか」

クルークは無言だったが、男は気にした様子もなく駆け寄ってきて、遠慮なくバシバシと肩を叩いている。

「おいおい、ちゃんと顔出せよー相棒。休暇はもう……って、えっ、なにこれどこのお嬢さん？　あれっ、このマントお前のだよね？　えっ？　ま、まままさかお前のコレ！？」

男が卑猥な指使いをするより先に、クルークのチョップが相手の眉間に炸裂して鈍い音が響いた。

「ぐおっ、お、お前手加減しろよ！」

「うるさい」

「なんだよ照れちゃって、このこのお！　あっごめん嘘すみませんもう言いません」

クルークが腰の剣に手をかけたので、男はあっさり引き下がった。
チャラ男だ、わかりやすくチャラ男っぽい。

男はわざわざクルークの背に隠れている俺のほうに回ってくると、丁寧に一礼した。

「はじめましてお嬢さん。俺はグラージ。アミル・グラージと申します」

にっこり。

俺は呆氣に取られて、ついまじまじと男を見てしまった。
流れるようなお辞儀は、額の赤い痕がなければ様になっていた
ろう。

しかしまさかクルークの知り合いが、それもかなり親しそうな知
り合いが、こんな『俺は女ったらしです』と看板をぶら下げている
ようなリア充・ド・リア充だと誰が想像できただろうか。

例えるならイケメンイタリア人。赤い巻き毛にたれ目で白い歯が
キラッてやつだ。

濃い、すごく濃い。エスプレッソよりも濃い。

「お名前をお伺いしても？」

ニコッ、キラーン。

ううわ……。

俺はクルークを間に入れてチャラ男から遠ざかった。こいつは駄
目だ。身の危険を感じる。

「帰れ」

「ええっ、そんな。久しぶりにあったんだからもっところ」

「帰れ」

クルークはにべもない。

いいぞその調子だ、がんばって追い払ってくれ。

「じゃ、じゃあひとつだけ。お嬢さん、男の兄弟はいますか？」

「えっ……」

「……お前……」

俺とクルークはざざつと後ずさった。

「え？ あれ、何で離れるの？ ねえ？」

「寄るな。好き物だとは思っていたが、どっちもいけるとは知らなかった」

「はっ？ えっ？ なにを言っ、あ、ああー！ ちよっ、違う違う、そうじゃないって！」

「腐れ縁もこれまでだな。命が惜しければ剣の間合いには入るなよ」

「だから違う、全然違うって！ お触れ！ お触れが出てんだよ！ 黒髪黒目の異国風の男を見つけたら、丁重に保護しろって！」

えっ。

なにそれ、その俺っぽいお触れ。

「どういうことだ」

「ほら、やっぱり知らなかっただろ。だからちよっとお茶でも飲みながらゆつくりと」

「さっさと言え」

「あーもうすぐに剣握るクセやめて。お前のはシャレにならんから早く言え」

「だーかーらあ、王宮から今朝、全部の街に通達が出たんだよ。見つけたらすぐに知らせろって。褒賞も出るってさ。噂じゃ角金貨が出るの出ないの言われてる。みんな血眼になって探してるよ」

16：脳内音声

『魔術指南書』の前半部分は、サナさんから聞いた6属性のことが書かれていた。

その後には神学的な話が続く。

至高神ルヴァインから生まれた4属性の精霊王云々。

炎の精霊王が猛々しいだの、水の精霊王は麗しいだのどうでもいいことでページがどんどん消費される。

本の半分を過ぎて、ようやく本題の魔法を使う心得だ。

火を扱う前に、まず本物の火を見つめること。

その形、その熱さ、その大きさを正確に思い浮かべることができ
るまで、毎日見つめること。

火傷には注意し、決して直接手で触れないこと。

髪の毛にも燃え移るので、あまり顔を近づけ過ぎないこと。

訓練をするときは、必ず野外で行うこと。

必ず桶に水を入れて用意しておくこと。

まわりに燃え移りそうなものがないか確認すること。

人に向けて術を使わないこと……といった注意事項が延々と大文字の箇条書きにされている。花火かよ。

だんだんこの本の性質がわかってきつつも先をめくると、子供が描いたような拙い挿絵と、訓練の仕方が載っている。

藁を2歩間隔で積み上げていき、それに火をつけること。

自分が直接出せる距離を把握すること。

呪文は自分にあった、簡単で口にしやすいものにする。

次は藁に直接火をつけず、その上に出現させること。

どれくらいの時間それが維持できるかを理解し、自分の力を確認すること。

維持した火の移動、大きさの変化の訓練など、下手くそな絵で図解しながらページは進み、動くものに当てる練習を最後にページがなくなってしまった。

著者は火属性なのだろう、火についてばかり書かれていて、他属性は少しも述べられていない。

「ふっ……」

たしかに基礎訓練は大事だ。
基本に忠実、それが一番の早道だ。

「ははっ……」

しかしこの内容で銀貨5枚ですよ。

この小学一年生のみんなのさんすう1学期用的な内容で、5千円なわけですよ。

飛翔や日曜などのコミックスが約10冊、うまいステイック納豆
味なら500本も買えちゃうんですよ。

ありえねええええええええええ！

ぼったくりもいいところだろ！
ふざけんな！

あれか、内容じゃなくて紙か、紙が高いのか！？ それとも手書きだからか！？

くそつ、ここにネットがあったら密林のレビューにケチヨンケチamazon

ヨンに書き込みして星ひとつにしてやったものを！

こんなものが本だとは片腹痛いわ！
出直して来い！

金返せええええええええええ！！

俺はベッドの端から端までゴロゴロ転がることを数回繰り返し、行き場のない憤りをどうにかこうにか発散した。



「……火か……」

体力を消耗してなんとか冷静さを取り戻し、最初からペラペラと読み直す。

はつきりいって、もう一度魔法を試してみたい気持ちはすごくある。

ちよつとくらいいいかな〜と思う気持ちもすごくある。

都合よくランプも灯ってるんだから、これをちよつと消してつけるくらい別にさ、ほら。ね？

でもこのお値段が素敵な本を読む限り、こちらの世界での魔法は料理や蠟燭の火種にちよつと便利だわくなどを使うものではないっぽい。

この『魔術指南書』も、ようするに攻撃をよどみなく行うための基礎訓練集なんだろう。真っ黒な熊に見えないこともない絵の横には『目を狙うんだ!』とか強調されて書いてあるし。つーかこれどこが目だよ、この絵じゃ全然わかんねえよ。

魔物のいる世界だから当たり前と言えど当たり前だが、ここでは魔法は攻撃するために使うものなのだ。

そういやサナさんも傭兵としてあまり力にならないことにクヨクヨしてたし、戦闘力が重視される傾向にあるんだろうな。

本を閉じて、じっと手を見る。

炎の想像なんて簡単だ。呪文らしき言葉を唱えれば、たぶん火が出る。きつと出る。

「……………やめとこ」

俺はゴロリと転がった。

別に必要もないのにすることもないさ。

失敗して火事にでもなったら大変では済まないんだし。

特にこの宿は、まさかの12角銀貨万円もするのだ。

ベッドの支柱は磨き抜かれていてピカピカ光っているし、窓は厚いガラスがはまっていて壁には壁紙まで貼ってある。

いくら弁償することになるかわかったもんじゃない。マッチ1本火事の元。魔法1回借金の元。これ以上の負債は辛い。やめておこう。

今の俺がしなくてはならないこと、それは目立たず騒がずひっそりと、この部屋で待機することなのだから。

夕方、あのイタリア男に会ったあと、クルークは最初に頼んでいた宿をキャンセルして、この豪華で警備のしっかりした宿に移動した。

なにもそこまでしなくても思ったが、傭兵ギルドで正しい情報を集めてくる間、俺をひとりにしてしまうからと押し切られてしまった。

俺も一緒に行けば済むことだと言ったら、珍しく口数多く忠告された。

「異国風の黒髪は稀です。先ほどの男や気性の荒い男たちが大勢詰め寄って来ることになります。どうなるか予想が付きません。ここにいてください」

などと言われてしまったのは、それはもう大人しく留守番することを選びますとも。ええ喜んで。

それに考えてもみる、俺が傭兵ギルドになんて行ったら、チャラ男やDQNに囲まれ質問攻めにされビクビク震える場面になるんだぞ。そんなの絶対可愛いに決まってる。絶対だ。中身は俺なわけだが、いや俺だからこそ青ざめた顔でオドオドと挙動不審になるのは間違いない。嗜虐心や保護欲を刺激されたDQNがどのような行動にでるか考えるだけでも恐ろしい。ハイエナどもの巢に自ら飛び込むようなものだ。そんな馬鹿なこと誰がしてやるものか。俺の嫁は俺だけの嫁だ。俺が見られない可愛い姿を、誰がお前らなんかに見せてやるものか。ふっ、ざまーみる！

見えない敵への歪んだ愉悦に浸っていたそのとき、ようやく待ち望んだコン、コココンという合図のノック音がした。

「俺です」

クルークの落ち着いた返事にホッとしながら、扉に駆け寄ってガチャリガチャリと二重の鍵をはずす。

さっと部屋に体を滑り込ませると、クルークは再び鍵をきちんと閉めなおした。

「どうでしたか？」

おおむ

「概ね奴の言った通りでした。黒髪黒目、24歳、異国風の男。発見次第丁重に保護、至急ギルドに連絡。褒賞大」

「歳もぴったりでですね……やっぱ俺なのかな」

「……24歳、ですか？」

「あ、はい。そうです」

「……………そうですか」

やはりクルークにも若く見えていたのだろう。すごく返事に間があった。

まあ、俺だって今の自分が24歳にはとうてい見えない。特に西洋系外人に囲まれている今、背も低いかなりの小娘に見えることだろう。16歳と言っても通用しそうだ。

かすかに動揺したクルークに同情の目を向けつつ、俺は首を捻った。

「王宮からの通達、っていうのが不思議なんですよ。なんで俺のこと知ってるんだろ……。あ、でも褒賞が出るなら、お借りしたお金を返したいしちょうどいいです。丁重に保護っていうくらいだし、たぶん酷いことされないですよ。自己申告でももらえますか？」

「通達には続きがあります」

「あー、本人ではやっぱり駄目ですか？ だったらクルークさんが」

「いえ、そうではなく。対象相手を限定するためのキーワードがあります。――『通り道、伸ばした手を思い出して』と」

「は？ 通り道？ 手……？」

「はい」

なんかそれ、覚えがないようなあるような、ないようであるような。

通り道つつつたら、通ってきた道とかか？ でも手ってなんだ。手をどこの道で伸ばすとか――

「……………あっ！」

俺はピンときた。ピンときたよ。

きつとそうだ、あれだ、あの白い渦の夢だ。

何かを叫んでいた男が、必死になって俺に手を差し伸べていた。
立て続けに変なことが起きてすっかり忘れてたけど、よく考えたらあれからおかしくなったんだよな。そうだそうだよ、きつとあれ
って俺がこっちに來るための――

（――兄さん！　よかった、やっと繋がった！　無事？　怪我はな
い？　今どこ？）

「うひっ!？」

脳内。脳内に声が響いてる！　間違いない！

（大丈夫？　怪我とかしてない？　酷い目にあってない？）

（お前……、そうか、お前だな！　俺がここにいるのはお前のせい
だろ！　そうなんだろ！　一体どういうことだ！　断固として説明
を要求する!）

（元氣そうだね、よかった……）

（なにが元氣そうだね、だ！　まったく俺がどんな目にあったと
思――）

（――無事じゃ、なかった？）

あつ。

ヤバイ。なんかこいつすごくヤバイ気がする。

頭の中に届く声は柔らかい感じなのに、エターナルフォースブリザード永久絶対究極氷結風斬の
詠唱準備に入ったような気配をヒシヒシと感じる。

ヤバイ。これはまずい。俺の高性能危険探知機がそう告げている。

メーデーメーデー、至急全力で食い止めよ。ラジャー、任務を遂行します。

（ごめんなさいすみませんでしたどんな目にも合ってません。無事です。これ以上なく無事です。すごくいい人たちに出会って衣食住しっかりと全部面倒見てもらってます。何不自由なく怪我ひとつせずとても元気に楽しく暮らしてます。ハイ）

（そう、よかった……。兄さん、今どこにいるの）

（えっと、カーフィス？ カーティス？ の街です。カイラーニアってめちゃくちゃ高い宿です）

（わかった。すぐ行く）

（は？）

（すぐに行くから、待ってて）

その脳内音声を最後に、にわかになが騒がしくなった。

宿の外で、悲鳴のような、喚声のようななどよめきがあがっている。

「……大丈夫ですか」

クルークが少し心配そうに俺を見ている。

俺はあいまいに頷いた。

「その、たぶん大丈夫です。ただ、なんていうか……すぐ来るって言っていました」

「……言ってた、ですか？」

「はあ、その……頭の中に響く感じです。どうも俺をここに連れてきたっぽい人が……」

……ん？ ちょっと待てよ、兄さんとか呼んでたような。

聞き間違いか？ まさか……いやそんな馬鹿な。ならしかし、ど

ういうことだ？

俺の混乱と同じように、階下も混乱しているらしい。「お待ちください！」とか、「ここから立ち入り禁止だよ」とか……なんかこれ、脳内で聞いたのと同じ声みたいなの……。

難しい表情をしてクルークと顔を見合わせたとき、前触れもなく扉が光った。

細かな粒子のように輝くその光は、神々しいほどに眩く視界を染める、白いエフェクト。

雪のように煌いて空気に溶けた瞬きは、同時に跡形もなく扉を消し去った。

「兄さん、会いたかった……」

扉のあった場所に、純白のローブをすっぽりと頭から被った男が立っていた。

男はすりとフードを押し下げる。

黒髪黒目。自分と同じ色合いをしたその男は、俺を見てとても嬉しそうに微笑んだ。

それは間違いなく、あの夢で見たのと同じ顔をしていた。

17..異世界の弟

にこにこと朗らかな微笑みを浮かべて、男はゆっくりした足取りで俺に近づいた。

俺は突然振って湧いたいろんな情報に頭がパーンとなっていたので、呆然と突っ立ったままだった。

だけどクルークは違った。彼の行動は素早かった。

サッと身を屈めて、土下座した。

「えっ――、うええっ!？」

いや、左足は立てていたからちょっと土下座とは違うけど、ちょっと違うだけでほぼ同じだろこれは。ほぼ土下座。ドゲザだよこんなもの。

頭を下げ、体の側面にまっすぐ伸ばした腕は拳を床に付けている。いかにも畏まっているクルークの態度は、わかりやすく服従とか平伏とかそういう意味が込められていた。

俺は仰天してそれを眺め、しかし跪かれた男はなんてことないといった態度で鷹揚に頷いた。

「ここは騒がしいから出発しよう。レスル・クルーク、君も一緒においで。馬車をよろしくね」

「はっ」

闖入者はにこにこしながら言い放ち、再びフードを深く被りなおしてから、迷いなく俺の荷物を手に取った。

「兄さん、行こう」

「は？ え、ちょっ、えっ？」

「説明するから、一緒に来て」

「ほっ、本当に？ 本当に全部説明して……」

「約束する」

念を押すまでもなく、男はあっさり頷いた。俺はうろたえてクルークを仰ぎ見たが、大丈夫というように頷いてくれたのでとりあえず安心する。

「一応、ね」

そう呟いて、男はおもむろに手を振った。

俺とクルークから、白い光——エフェクトが立ち昇る。

ビクリと慄く俺に、男はフードの隙間からにこっと笑顔を向けた。

「大丈夫だよ、ただの目眩ましかから」

俺たちが借りていた部屋は2階だった。男は先に部屋を出て階下に向かった。俺はクルークを盾にしつつ、混乱した頭を抱えて後に続く。

なんだろう。なんだろうこれ。すごく胸騒ぎがするのにな、導き出された答えを必死で否定している自分がいる。そう、そんなはずがない。あまりに急展開すぎて頭が付いていけないだけだ。いくらなんでもそんな都合のいいことが起きるはずがないのだ。そうだそうだ、そうに決まっている。

でも、だけど、もしかして、そんなはずは、でも——同じ単語がぐるぐると脳内を駆け巡る。パンクしそうだ。ああ胃まで痛くなってきた。

白衣の男が出てきたことに気付いたのだろう、宿の主人が慌ててこちらに向かってきたと思ったら、何も無いところでまるで壁にでもぶつかったような仕草をして派手に後ろに転んだ。あれは痛い。

「まだ通れないよ」

男の声は優しくかった。苦笑しているようだ。

しかし宿の主人は怒りにでも触れたかのように這いつくばって震え、額で床を擦っている。潰れたひきがえるのような、真正正銘の土下座だ。その必死さが怖い。怖すぎる。見てはいけないものを見せ付けられている気がひしひしとする。

なんていうかさ、いつそのこと俺もここで跪いてさ、群集のひとりとなってやり過ぎるのが一番いいんじゃないかな。うんそれはよさそうだ、とてもいい案だ。さすが俺、ナイスアイデア。

「御使^{みつか}い様におかれましては、と、当宿にななにをこそ望んでいらせ——」

「騒がせてごめんね。もう帰るから」

「ははっ！ いえ、そそそのようなもったいないお言葉——」

「これ、修理代」

ことん、と男は主人の頭の先に四角い金貨を一枚置いた。

あつ、あれはもしや噂の角金貨か！？ 換算すると約200万円の価値となる超金貨！ 思ってたよりもずいぶんでっかいな、携帯電話くらいはありそうだ。

俺は宿の親父が平伏しながらもそれをしっかりと掴み懷になおすところまで、じっくりじっと見つめてしまった。いや、だってほら、あんなキンキラしたものの見せられたら目え釘付けになるよね。別に俺がことさら現金に弱いとか、そういうわけではあるけどさ。

宿のロビーでもすべての人が跪いていた。その中を男は悠々と進み、俺はクルークに半分引きずられるようにしてついていく。

魔法が効いているのだろう、俺たちに目を向けるものは誰もいない。でもたぶん目眩ましなどなくても、みんな男に釘付けだったはずだ。それほど一心不乱に、すべての人の意識がひたすら彼の白い姿に惹きつけられている。

宿を出てもすごいことになっていた。もう日も落ちてそれなりに経つというのに、なぜかたくさんの人がいて、やはり男を見たとき一斉に跪いた。

俺は実のところ、エフェクトの色が白だとわかったときのサナさんの行動は、ちょっと大げさに過ぎると思っていた。

なんてことはない、怖いぐらいにマジだ。本気なんだ。本気とかいて大マジだよ。水戸黄門の印籠よりもすげえ。実際目の当たりにすると引く。ドン引きだ。迫力が違いすぎる。男の背中を射る視線の集中業火のすごいことすごいこと。これを受け止めるなんて小市民には無理、すごく無理。絶対どころか究極に無理。

俺、人前で魔法使わなくて本当によかった、本っ当によかったー
！！！！

クルークはふらふらびくびくしておぼつかない俺を先に荷台に押し込めると、厩舎から馬を連れ出してきて手早く繋いだ。

男は馬車の準備ができたことを認めたのか、俺たちに向けて小さく頷いた。

純白のローブをひらめかせ、白い手袋を嵌めた右手でスッと天を指す。

「――祝福を」

瞬間、光が舞った。

その場にいた全員の体から白いエフェクトが放たれる。

思わず零れ落ちたため息がどよめきとなって一帯から発せられ、その後大きな歓声へと変わった。

うおお……なんぞこれ。これが御使い様パフォーマンスということか、そうなのか。

御使い様！ 御使い様！ と熱狂的なコールが上がる中、俺たちは先ほどの一瞬で屋根よりもずいぶん高いところに浮いていた。鯉のぼりではない、馬のぼりだ。

な、何を言っているかわからねーと思うが、俺も何をされたのかわからなかったのだ。もうパニックもパニック。口もポカーン。頭の中もエフェクトがかかって真っ白です。あ、俺いま上手いこと言った。あはははは、あははははははは。

馬車の足元はうっすらと光の帯が伸びていた。

クルークに御された馬は特に怯えるでもなく、タタッタタツと軽快な足音を立てて光の道をすごい速さで駆けて行く。荷台はまったく揺れがない。もうなんなんだ。いったいどこから突っ込めばいいんだ。

男は俺の荷物から勝手にエリクサーを取り出した。ご丁寧にストローも挿している。

「はい、どうぞ」

「……………」

再びフードを下ろした男の顔は、嫌になるほどにこにこにこにしている。

俺は無言で木筒を受け取り、力いっぱいズゾゾゾと吸った。残量が気になるとか言ってる場合じゃなかった。いま一番必要なのは心の平安だ。これまでは主に肉体疲労に効いてたけど、それでもエリクサーなら、エリクサーならきつとなんとかしてくれる。

「落ち着いたかな」

男は絶妙のタイミングで聞いてきた。

まさにいま『エリクサー』って名付けた俺天才。やっぱ精神も回復するんだな』と自画自賛しつつその効力のすごさを噛み締め、よし、落ち着けた、とか思ってた瞬間に言ってくるんだから、これはもう只者ではない。

いや本当に只者じゃないな、彼がもうひとりの白の使い手、王都の御使い様であることは疑いようもないのだから。

「……説明、してくれるんですよね」

「馬車は浮かせてるだけだし、道は下からは見えないように闇で覆ってるよ。誰も気付いていないから安心して」

「いや、そういうことじゃなくて」

へえそうなんだー、とか思ってたけど、そうじゃなくてさ。

「うん、わかってる。そうだね、どこから話せばいいかな……」

男は眉を寄せて悩むそぶりを見せながらも、口元が緩みっぱなしだった。

なにがそんなに楽しいのか、こらえられないといったように笑みを浮かべ続けている。

「そうだね、そこからしよつか。……俺はね、兄さんに会えて本

当に嬉しいんだ。17年ぶりにやっと会えたんだから」

俺はハッとして凍りついた。

確かにあの出来事は、もう17年も前になる。

でも、でも、そんな、まさか。

否定して否定して、そんなはずはないと奥に封じ込めた答えが、
どうしようもなく主張している。

「まさか、お前……、まさか、本当に」

「俺の今の名前は、アヴェ・ト・カルフ・カージュ。こちらに来た
とき、ずっと泣き叫んでいたから自分の名前をちゃんと発音できな
くて、こんな名前をつけられたんだ。カズ、カズって言ったんだけ
ど」

カズ。

俺が手を離れた一瞬で、なぜかいなくなってしまった4歳の弟――
和樹。

弟がつまづいたはずみで砂場のおもちゃを道にばら撒いてしまい、
俺も拾おうと繋いでいた手を離れた。それが、最後の記憶。

「産みの親にもらった名前は、安部和樹。俺は間違いなくあなたの
実の弟だよ、瑞樹兄さん」

◇

その一言は、あるべきところに納まるように、俺の胸にすんと

落ちた。

「カズ……、本当に、和樹なのか」

「そうだよ、ミーちゃん」

にっこり笑うその顔に、幼い頃の面影は見出せない。

いや、俺は罪悪感に負けていつも弟の写真からは目を逸らしていた。記憶なんてとうにあやふやだ。どんな顔をしていたかなんて、いまさら思い出すこともできない。

それでも、ミーちゃんと呼ばれるその響きはあまりにも懐かしかった。

にーちゃんだと何度言っても、俺をミーちゃんと呼んだ弟。

少し発音が遅く、舌つたらずで、自分のことをかじゅ、と発音していた弟。

それがこんなに大きくなって目の前にいる。

そりゃそうだ、俺が24歳なんだから、和樹はいま21歳のはずだ。

俺は食い入るように男を見つめた。

にこにこにこにこと、擬音が聞こえそうなほど笑顔を絶やさない男は、俺には全然似ておらず爽やか和風美青年だ。

それでも、はじめて見たときからなんとなく誰かに似ているとは思っていた。

そうなんだ。

母さん。

和樹は母親に似ている。

仏壇の写真と、あの優しい笑顔と面影が重なるんだ。

しかもよく見れば見るほど、憎たらしいことに父さんと母さんのいいパーツだけを集めてできた顔をしている。

なんてことだ、こいつは本当に俺の弟なんだ……。

「納得してくれた？」

「……した」

「よかった」

俺が頷くと、ほっとしたように、にこにこ笑顔がさらにふにゃつと崩れた。

うわー、マジ母さんだ。なにこれどうしよう。

「和樹、お前……なんで、どうして」

「うん、ちゃんと話すよ。俺があれから、いったいどうしていたのかを」

兄さんに聞いて欲しい。

和樹はそう言って、柔らかい声で話し始めた。

18：渾身の一撃

「……気が付いたときにはもうこの世界にいて、俺は大きな木の根元に座ってた。すぐそばにいたはずの兄さんはいないし、ここがどこかわからないし、何がなんだかまったくわからなくて、俺はたくさん泣いたんだ。あの頃は泣き虫だったしね、何より泣いたら兄さんが見つけ出してくれると思ってたから。大声で泣けばきつと氣付いて迎えにきてくれる、だからもっともっと大きな声で……そう思ってた、すごい勢いでひたすら泣いていたら、先生が飛んできて俺を捕まえて、育ててくれたんだ」

「先生？」

「先生は、俺の……師匠のような人、かな。当時も今も王宮で魔術師長をしてる。国にひとりしかいない6属性保持者だから、すごく知識があって面白い人なんだ。……兄さんも、ぜひ会ってほしいな」
「もちろんだ」

俺は即答した。

その先生とやらは、弟の命の恩人で、育ての親みたいなものなんだろう。捕まえたつてのがちょっと引かかるけど、和樹は人見知りなところがあつたしな。

本当は肩書きが偉そうなのでできればすぐ遠慮したいところだが、しかしそれを押しても挨拶に行かねばならんのが兄というものなのだ。俺だってそれくらいの礼儀作法は心得ているとも。だって俺は兄なんだ。兄ちゃんなんだ。弟がお世話になってますと頭を下げるのは当然の義務であり権利なのだ。

和樹は少し照れくさそうに微笑みながら、話を続けた。

「先生は俺の泣き声が王都まで響いてきたと言ってた。俺がいたのは北東のリケ村の近くだったらしいけど、けっこうすぐに飛んで来てくれた。これを放置したらまずいことになるって直感したんだって。その勘は幸か不幸か正しくて、膨大な力を持った子供はまさかの神属性だった。連れ帰ってはみたものの、俺は誰にも懐かなかつたから先生はすぐ手こずってたな。当時ヴィノグラードは戦時中だったし、先生も西へ東へ奔走して慌ただしかったしね。結局どこに行くにも俺を連れて行ってたけど」

「戦時中って……戦争に連れて行ったのか！？ 子供のお前を！？」

「白い光が神属性だという伝承は、この国だけじゃないから仕方がなかったんだよ。あり得ないと言われていたものが存在して、しかも伝え継がれていた通りの力を持っているとしたら、それはとても厄介な存在だ。先生の目の届かないところだと誘拐か暗殺される可能性が高かったし、それなら前線でもそばに置いたほうがマシだろうってね。先生は強かったし、俺も本能で魔法を使えてたから平気だったよ。大丈夫大丈夫」

「大丈夫って、お前……」

本当になんでもないように笑顔を絶やさず話す弟に、俺は言葉を失った。

いくら鈍い俺でもさすがにわかる。

それはつまり、命のやり取りを目の前で見たことがあるということだろう。

それどころか、幼い子供が、自分に害をなそうとした相手を返り討ちにしたことさえあるということなんだろう。

あまりのことに俺が何も言うことができないでいるうちに、和樹は淡々と先を続ける。

「9歳の頃かな、俺はいい加減嫌になったんだ。家に帰る方法が見

つからないまま、時間だけがどんどん過ぎていく。小競り合いが頻繁にあったからあちこち連れ回されて全然落ち着けなかったし、術式が上手く連動しなくて帰還用に組んだ魔法陣は失敗続きだし、他にもいろいろ……嫌なことが積み重なって、ものすごく苛々してた。それで、とりあえず鬱陶しい戦争を終わらせようと思って、先生と話しあった結果”白の御使い様”を作り出したんだ」

「作り出したって、御使い様はお前なんだろう？」

「俺であって、俺ではないんだよ。俺は表向きには先生の弟子、それだけなんだ。この白いローブを纏って、白い光を放ちながら魔法を使う人物が、御使い様ってこと」

「ああ、覆面ヒーローってことか」

俺が感心して呟くと、弟は嬉しそうに声を上げて笑った。

「あははは。うん、うんそうだね、そういうこと。そして俺は御使い様になって、戦争を終わらせた。報酬として王城の片隅を研究所にってもらって——」

「待て、そこをはしよるなよ。どうやって終わらせたんだ？ 魔法で、だよな？」

「国境を越えた敵兵を全部吹き飛ばして、矢とか魔法はそっくりそのままお返ししたりとか、それだけだよ。戦うための力の使い方は簡単だし、いろいろ実験もできたしちょうどよかったんだ。瞬時に移動できるよう組み上げた術式と、天恵との連携が上手くいくようになったことで、別個の魔法陣を接続して——」

「待った。魔法陣はまあいいとして、天恵って？」

「ええと……『超能力』、みたいなものかな。魔力とは別種の、生まれ持った才能だと言われてる。主に精神に働きかける力だよ」

「魔法だけじゃなく、そんなもんまであるのか……。つーかお前、『超能力』なんて言葉よく知ってたな」

超能力という単語だけ、弟は日本語で話していた。

4歳児がそんな単語を覚えてるものなのかな。俺なんか4歳の頃の記憶どころか、昨日の夕飯のメニューさえうろ覚えだというのに。そんな俺の素朴な疑問は、微笑みの爆弾となって返ってきた。

「ああ、ほら、俺と兄さんは魂が繋がったから」

「……………は？」

「兄さんがこちらに来るときに、俺を通り抜けていったよね。あれには本当に困ったんだよ、そのせいで俺は兄さんの膨大な情報を一遍に受け取ってしまって、昏倒するはめになったんだから。目覚めるのに8日もかかってたし、起きたときは本当に青ざめたよ……この間に兄さんになにかあったらどうしよう、やっとな成功したのに、取り返しのつかないことがあったらどうしようって、本当に……」

「いや、待て。ちょっと待て。魂が繋がるって、俺の情報ってどういうことだ」

「そのままの意味だよ？ 俺たちはあのとき一時的に魂が混ざり合ったから、繋がったところで仲介しあってるんだけど……、兄さんは無意識なのかな」

「仲介？ 無意識？」

「だって、兄さんもこちらの言葉を普通に話してるし。俺も兄さんの……『日本語をちゃんと話すことができるのは、兄さんの言語野を経由してるからだよ』」

俺はあんぐりと口を開けた。

なんだかよくわからんけど、俺がこっちの言葉に不自由しなかったのは、弟の魂とやらが繋がったとかいう不思議現象のおかげってことなのか。なんてこった。すごいな異世界、意味わからん。

（——こうして鮮明な念話ができるのも、そのせいだし）

「うひっ！ それびびるからやめれ！」

「便利だよね」

あははと楽しそうに笑う弟に、俺はしかめっ面をして見せたが長くは持たなかった。

俺は弟に負い目があった。

和樹がいなくなったのは、俺のせいだ。

あるとき俺が手を離さなければ、きっと俺たちはあちらで普通の兄弟として過ごせたはずなのだ。

こいつは人の生死を左右するハードな生活なんて知らずに、安穩とした日々を享受できたはずなのだ。

何度思ったことだろう。

何度夢見たことだろう。

忘れようにも忘れられるはずもなく、ふとした折に手を離れた夢を見ては落ち込み、手を離さなかった夢を見ては現実に打ちのめされ、数え切れないほどの後悔に苛まれてきた。

正直なところ、生きているなんてもう思ってた。そう信じ続けるのがきつかったせいもあるし、現実問題17年が経過しているのだ。再会など夢のまた夢だと決め付けていた。

それがいま、とても嬉しそうに屈託なく笑っている弟が、和樹が俺の目の前にいる。

現実だ。今度こそ本当に夢じゃない。手の届くところに弟がいるのだ。

難しい顔なんて続くはずもなく、俺は自然と頬を緩ませて苦笑を浮かべた。

「繋がってるってのはよくわからんが、わからんということがわか

った。んで、俺の情報ってなんだ。昏倒ってどういうことだ？」

「あ、うん。あの……、その……」

あれ？

これまでスラスラと話していたのに、言い辛そうに言葉に詰まる様子がとても怪しい。

なんだかちよっと嫌な予感がしませんか。俺はします。すごくします。

「つまり、俺の天恵は、経験や思考などに強く反応するもので……」

「なるほど、わからん。俺にもわかるように三行で頼む」

「ええと、だから……、一言で言えば、これまでの兄さんの行動は、ほぼすべて把握している、ってこと、かな」

「……なん、だと？」

行動を把握しているってどういうことだ。

これまでってのは、どこらへんから始まって、どのあたりまでだというのだ。俺がこっちにきてからいままでということか？

「うーん、たとえば……怪我をしていないのに左腕に包帯を巻いて震えながら「し、静まれ……俺の腕よ……！」と言ったとか、くじ引きではずれを引いて「それが世界の選択か……」と呟いていたこととか、最初のペンネームは闇輝騎矢で、漫画のストーリーのはじまりは——森の奥から声がする。俺の名を呼ぶ声がする——と、大剣背負ったクールな主人公クライドが」

「もういいわかったわかりましたすみませんごめんなさい許してくださいようするに俺に死ねということか死ねということだなははははは大丈夫だ問題ない俺のライフはとっくにゼロだ」

和樹からの渾身の一撃！ 俺は倒れた。ああ藁がいっぱい詰ま
ててよかった。頭打っても痛くない、痛くないようふふふグフウ。

つまりあれか、これまでっていうのはずっと前から最近までっ
てことか、そうなのか？

我が弟はそのえげつない天恵という超能力で、下手したら24年
間の俺の行動を、俺の暗黒面を、マイフェイバリットブラックヒス
トリーさえ余すところなく知ってしまったと、そういうことなのか？
掘り起こせば血涙必須のパンドラの箱を、俺でさえ触れることを
ためらうモノリスを、いとも簡単に手に入れてしまったと、そうい
うことなんだな？ そうなんだな？

弟と感動の再会を果たしたと思ったらこの仕打ちですよアヒヤヒ
ヤヒヤヒヤヒヤ！

鬱だ死のう。死んで詫びよう。

「ごめん、兄さん。俺もこんなに読めるとは思ってたんだ。
不可抗力だったんだよ」

「ははは。もういつそひと思いに殺してくれ。痛くないように夜露
死苦」

「でも、俺はすごく嬉しいよ。嬉しかったんだ」

「なんだ、俺が死ぬことがそんなに嬉しいのか。まあそうだよなこ
んな気持ち悪い人間はいなくなったほうが世のため人のためだよな」
「あのとき手を離れたのは、俺なんだよ。兄さんじゃない」

ビクッ、と俺の体が震えた。

「……っははは。なにを、言ってるんだか」

「俺から手を離れたんだ。兄さんが自分を責める必要なんてなかつ
たのに」

なだめるように、丸まった俺の背中に暖かな手が触れた。

「ぼろぼろになるまで俺を探してくれて、ありがとう」

その瞬間、いろんなことがフラッシュバックした。

弟がいなくなったあと、俺は毎日探し続けた。

毎日毎日毎日探した。学校も行かずに雨の日も雪の日も探して探して探しまくって、肺炎の一手手前まで行って父に泣きながら怒られて、ようやく探すのをやめた。

でも俺はほっとしたんだ。これだけやったんだから、俺は許されたと思った。そんな自己満足でしかなかったんだ。感謝なんてされる筋合いはないんだ。そんな資格は俺にはないんだよ。

「ありがとう、兄さん」

まずい、まずいぞ。

なんだかすごく息苦しい。ははは、俺は本当に死ぬかもしれんな。

顔をシーツに押さえつけているからだだけじゃない。呼吸がうまくできないんだ。

胸に生まれた熱い塊が邪魔で、喉元まで迫り上がってきて息を止めるんだ。

苦しい。そう、これは苦しいから目が熱いんだ。

な、泣いてなんかいないんだからね、これは心の汗なんだからっ！

「ずっとずっと会いたくて、やっと念願が叶ったんだ。俺がいなかった間のことも知ることができたし、本当に嬉しくて仕方がないんだよ」

ああくそつ、だめだだめだ。全然だめだ。

なんでお前はそうなんだ。俺の過去を見たんだろ。いろいろ知っちゃったんだろ。中学の体育祭でオクラホマミキサーを踊ったとき、全女生徒が俺とはエアードダンスを三年間貫いたことも知っちゃったんだろ。あいつらすごいんだぜ、決して俺に触れないよう数センチの距離を保ちきって踊るんだからなんてプロだよまったく。ああもうどうしてあるとき休まなかったんだ俺の馬鹿馬鹿、でも父さんを心配させるわけにもいかないだろ、そうだろそうだろ、つーかクソ真面目に出場なんてしないで腹を下したでも足をくじいたでもなんでもいいからどっかに隠れてたらよかったのにそんな簡単なことさえ思いつかなかった中学の俺は本当に馬鹿だ。

実際あの頃の俺は変な奴だった。暗かったし痛かったしでもってたし厨二病だし気持ち悪い奴だった。高校に入って多少改善され、大学に入って開き直ったが、根っここの部分はずっと同じだ。俺でさえ俺を気持ち悪いと思うんだ。そんなのわかりきってんだよ。受け入れられるはずがないんだよ。

「兄さんのことを気持ち悪いなんて思うわけないよ。兄さんが俺の兄さんで、本当によかった」

だからどうしてそんなことを言うんだ。それは違う。お前は間違っている。

いいか、優しいことを言われ慣れていない俺にそんなこと言ったらだめなんだ。

いろんなメッキが剥がれ落ちてしまうだろ。心の鎧が碎けちゃうだろ。

そんなの俺が困るんだ。俺はお前みたいになっすぐな心根とか持っていないんだよ。こんなときどうしていいのかわからないんだよ。

「えっと……、笑えば、いいと思うよ?」

.....。

.....。

俺は顔をシートに押し付けてゴシゴシとぬぐった。ささくれた藁の先が当たって痛かった。

和樹を見上げるとにこにこしている。満面の笑顔だ。しかし俺は誤魔化されない、誤魔化されないぞ！

「お前、まさか——」

「あははは。うん、そうなんだ。ごめんね」

素直に認めて首をちょこつと左に傾げる弟に、俺は眩暈がした。男がカワイ子ぶってもキモイだけなんだよちょっとイケメンだからってふざけんな似合うじゃねーかくそが！

「お前、俺の考えまで読めるんだな！？ そうなんだな！？」

経験や思考に反応するというのは、こういうことなのか！？
ようするにすべて筒抜け！？ シースルーどころかスケルトン！？
なんとという厄介な能力を持ってるんだ弟よ、兄ちゃんは衝撃のあまり涙も感動も引っ込んだわ！

19..真実の琴線

「和樹君、ちょっとそこに正座しなさい」

「はい、兄さん」

俺たちはほとんど揺れない荷台の上で、向かい合って正座した。今までになく真剣な顔を作って、俺は厳かに言い渡す。

「いいですか、俺の過去を知ってしまったことはもう仕方ない。いや、全然仕方なくなんかないけど知られてしまったからには仕方ないことにしないと仕方がない。俺の心を正常に保つためにも仕方ないったら仕方ないんだ。だから仕方ない、仕方ないことにする。よし、えー、とにかく仕方ないから、忘れなさい。そう、すぐに忘れなさい。光の速さで忘れなさい。兄ちゃんも忘れます。お前もきれいさっぱり忘れて思い出してはいけません。そうすればなかったことになります。いいですね、わかりましたね」

「善処します」

和樹は笑って頷いた。

断言を避けるとは、お前はいつたいどこの政治家だ。

「返事は『はい』か『YES』だ。いいな、わかったな。わかったら返事をしなさい」

「はい、兄さん」

「よし。えー、いいですか、これからは兄ちゃんの考えを読んではいけません。兄ちゃんはとても繊細なのです。胸の内を知られると羞恥で死ねるほどガラスのハートなのです。俺を殺すにゃ鉄砲はい

らぬ、ちよいと心を読みりゃいいってなもんです。それともなにか、お前は本気で兄ちゃんを殺す気か？ 違うよな？ そうじゃないよな？」

「はい、違います」

「そうだろうさ、だったら話は簡単だ。俺を生かしたければ、今後は絶対に考えを読んではいけません。俺たちのこれからのために、よりよい生活のために、明るい未来のために、日本の平和のために、絶対対に駄目だ。いいですね、わかりましたね。約束できますね」

「はい、兄さん」

和樹は笑顔のままあっさりと頷いた。

えーいにこにこにこにこしやがって！ マジでわかってんのかこのにこにこ大魔神が！

まったく、この笑顔が本当に厄介だ。

母さんに似ているだけでもやりにくいのに、悪意をミクロンも感じさせない晴れやかな笑顔というのはすごく危険だ。危険すぎる。まあいいかゝとか、仕方ないなゝなんて感じてなんでも流してしまいうそになる。怖い怖い。

万人が受け入れそうな優しい微笑とか、サイコメトラーの標準装備としては凶悪すぎるアビリティだろ。くそっ、上手く育ちやがって。

だいたい父さんと母さんの微妙なところだけを集めてできていた俺とはこれっぽっちも似てないってのはどういうことなんだ。いくらなんでも不公平だ。ことごとく逆張りしすぎだろ俺の遺伝子め、後続にいいもの残してどうする気だ。おかげで弟はリア充間違いないだぞ。ああそうか俺のおかげで弟がイケメンということか。なんだそれ。爆発しろ。俺の青春を返せ。

ま、まあいい。見た目にこだわるなんて浅ましいことだしな。皮

一枚のことなんてどうでもいいのだ。そうだ、今の俺は理想の美少女だし、そんなことぐらいでひがんだりしない。しないとも。全然気にしてなんかいないさ、あはははは。

「……………」

「……兄さん？」

ちくしょお、ちくしょおおおおお！

もげろ、もげてしまえ！ お前も俺のように女になってしまえ！

「——ん？ そういや、何で俺は女なんだ？」

「えっ？ 兄さんが自分でそう選んだんだよね？」

「はあ？ お前のせいじゃないのか？」

「まさか。そんなことしないよ」

弟はきっぱりと否定した。

ええー？ 俺てつきりこの姿も和樹がなんかしたんだとばかり思ってたよ。だってお前、兄ちゃんが姉ちゃんになっても全然驚かなかったくせに。こういうことなんだ。

「選ぶも何も、俺がこっちに来たときにはもうこの姿だったんだぞ。本当にお前じゃないのか？」

「違うよ、直接会うまで女の子になってるなんて知らなかったんだから。俺じゃないよ」

「なんだと……？ じゃあ誰なんだ、わざわざ俺を女にしたかった奴がほかにいるってことか？」

「うーん……、それはないと思う。生物を変化させるのはとても難しいんだよ。俺も苦手だし、他の誰かにできるとは思えないな」

「だったらなんで俺は女なんだよ」

「考えられるのは……そうだな、やっぱり兄さんが自分でそうした

んじゃないかな。ほら、俺をすり抜けたときに、兄さんは俺の魔力も合わせ持った状態で界を超えたよね。こちらで体を再構築するのに二人分の魔力が深層意識にまで作用して、自分の肉体を形成する一瞬に、鮮明に想像することができた姿だったから……とか？とにかく、どんな方法だったにしても、兄さんがその姿を願ったからというのが一番可能性が高いと思う」

「……………」

やばい、なんかすごく納得した。否定できない。

俺は二次元が好きだ。大好きだ。三次元の女など猫にも劣る。おっと、猫に失礼だったな。

しかしだ。そんな二次元しか愛せない性癖だというのに、俺は現在三次元であるこの娘の見た目がすごく好きだ。大好きだ。ドストライクだ。これ以上なくタイプだ。まさに理想をリアルに具現化したらこうなるだろうという最高の出来栄えなのだ。

なんてことだ、俺は俺自身でこの姿を選んでいたかもしれないというのか。

「それじゃ、俺が自分で元に戻りたいと思ったら、戻れるってことか？」

「うーん、ちょっと難しいかな……」

「えっ、なんで？」

「全身変容はすごく複雑なんだよ。しかも生きているわけだから、いろいろ制限があるし……」

「お前でも無理なのか？」

「できないことはない、と思うけど……どうかな、試したことがないからわからない」

「そ、そうか……」

「それに戻れたとしたら、もう二度と今の姿にはなれなくなるけど、

いいの？」

「えっ!？　なんで!？」

「無意識のほうで完成度が高いんだよ。意識的に変わるには正確な術式を組まないといけないし、いろいろ大変なんだ」

「そ、そうなのか……」

俺が元の冴えない男に戻ろうとしたら、この娘が消えてしまうのか……。

この世界の宝とも言えるべき麗しさを誇る美少女が。

稀有な美貌と愛らしさを同居させるこの完璧な容姿が。

天然記念物よりも尊い素直クールな胸キュン巫女が。

本当の夢まぼろしとなって消え失せてしまうか？

俺の嫁が、俺の夢が、俺の理想が、二度と手に入らないかと……？

「……と、とりあえずそれはちょっと置いてこう。うん。すぐに戻らないといけないわけでもないしな、ははは」

「そうだね」

俺の逃げ口上に、弟はあっさり頷いた。

そうそう、お前だって暗くてもさい兄貴より可愛い美少女な姉のほうがいいに決まってるよな。うんうん。

「つかそんなことより、そうだ。もっと根本的な問題を聞いてなかった。俺は元の世界に戻れるのか？　てかなんでお前は俺をこっちと呼んだんだ。お前があっちに戻つて……」

サーツと血の気が引いた。

あれっ、なんかいま真実の琴線に触れちゃった気がする。

答えがパーッと目の前に示された感じがする。えっ、嘘、まじで？

和樹はつい先ほど言っていたではないか。帰る方法を探すために、戦争を止める助力をしたことを。まだ9歳だったというのに、ほんの子供だったのに、それほどの力があつたのだということ。

いまこの国はどことも戦火を開いていない。サナさんにもクルークにも戦の話は聞いてない。街だって活気に溢れていたり、のんびりしていたりと様々だったけど、戦の傷跡らしいものに俺が気付くことはなかった。

ということとはだ。けっこう前に終戦して、それ以後国と国との表面的な争いは発生していないということじゃないだろうか。

10年前、いや12年前か。それからずっと、帰る方法を調べていて、そして――

「……………」

和樹は微笑んでいる。

俺が黙って考え込んでいる間、弟は口を開かなかった。視線が交差する今でさえ、じっと唇を引き結んでいる。

言えればいいのに。違うって。

弁解すればいいのに。そうじゃないんだって。

たとえば帰る術が失敗して、間違えて俺を呼んでしまうことになったんだとか。

ハプニングが起きて、どうしてかこうなってしまったんだと。

そう言ったなら、俺は仕方ないと言ってやるのに。

俺も一緒に戻る方法を探すから安心しろって、言ってやるのに。

和樹は何も言わない。ただ静かに微笑んでいるだけで、頷きもし

ない。

俺は決定的なひとことを、口に出すしかなかった。

「戻れないんだな……」

弟がここにいて、俺もここにいます。答えはとうに出ていたのだ。

この世界に住む和樹が、神ほどの力を持つと言われる白の使い手が、10年もの歳月をかけて帰る道を探したというのに、ここにいないのだから。

俺たちは元の世界に戻れない。

「でも、どうして。なんで……なんで俺まで、こっちにいますんだ」

和樹は笑みを湛えてはいたものの、俺からずっと視線を逸らした。

「さっき、どこまで話したかな……。俺が御使い様となって力を誇示したことで、この国が他国から侵略されることはほぼなくなった。そう、それで俺は帰るための方法を本格的に探しはじめたんだ。平行して、どうして俺がここにいても探った。でもよくわからないかった。誰かに呼ばれたりして来たわけじゃない。召喚術はあるけれど、それはこの世界の中に限ったものだったし、異世界という概念自体が普及していないんだ。だから偶発的な要素が絡み合って、俺は事故にあったみたいここへやってきたんだろうと思った。たとえば、突然足元に穴が空いて、深い深い落とし穴に落ちたみたい……。そしてその落とし穴はあまりにも深く、入り口さえ見えないものだった。絶望の中、俺の手元に残っているものは、兄さん、父さんと繋がっている細い糸だけだった」

「糸……?」

「繋がりを、糸みたいに感じたんだ。この先は兄さんと父さんに繋

がっているということだけがわかっていた。でも、俺がこちらの世界に来てしまったときに、落とし穴自体はふさがってしまったんだ。俺は糸の周りに、もう一度落とし穴と同じようなものがないか試行錯誤し、何年か経ってようやく似たような穴がある程度作り出せるまでになった。けれど肝心の糸は細すぎて、それを伝って登ることには向いていない。穴も不完全で、向こうからこちらに水が流れ込んででもいるように、激しい抵抗があった。これは本当に戻れないかもしれないと理解しはじめたときに、――父さんとの繋がりが、切れたんだ」

「それは……」

そうだ、父は三年前に他界した。
和樹は頷いた。

「うん、父さんが亡くなったんだとすぐにわかったよ。糸はすごく細くなってきていたし、俺が実験をしているときじゃなかったから、間違いなくそうだと思うた」

「……そうか」

「俺は追い詰められてしまった。すごく焦ったんだ。兄さんの糸まで切れてしまったらどうしようって。嫌だ。そんなことは耐えられない。諦めたくない。いますぐ帰りたい。でも帰れない。ならばどうすればいい。こちらから戻れないのなら、……兄さんを落とせばいい。俺が登ることは難しくても、兄さんをこちらに呼ぶのは、それほど難しいことではないと気付いたんだ」

「……もういい」

「それからは順調だった。術式を組みなおすのも上手くいったし、魔法陣は正常に作動して」

「もういいから」

「俺は兄さんをこちらに落とすことに、成功した」

狭い荷台の中に沈黙が落ちる。
俺たちはしばらく無言だった。

タタッタタツと馬の軽快な足音と息遣いだけが響いていた。クルークは御者に専念しているのか、幌越しの影はまるで置物のように微動だにしない。視線を向けなければ、そこにいることも忘れるほどだ。

俺は立ち上がった。

神妙な風情でありながら、しかし唇は笑みをかたどったままの弟の頭に、思いつきり拳を振り下ろした。

「あ、待っ」

ビシッ！

「くうううううっ!？」

手が、手がああああ！

何これ超痛いんですけど!？ なんか全ダメージが俺に来てるんですけど!？

石頭にもほどがあるだろ、どうしてお前はそんなにピンピンしてんだよ！

「ごめん兄さん、ほらエリクサー」

「ぬぐぐ……」

「攻撃は自動的に反射するようになってるんだ。言っておけばよかった」

なんという完全防御。マジそういうことは最初に言って。俺の拳

が砕けちゃう。

俺は涙目になりながら、筒に残っていた最後の一口を啜った。痛みがすうっと解けて消える。あーもう俺エリクサーがないと生きていけない。この素晴らしさを知っちゃうとちよつとやそつとの痛みにも耐えられないね。こんな便利なものを覚えたら手放せないに決まってる。サナさんに会ったら、絶対また少し分けてもらおう。そうしよう。

「大丈夫？ 兄さん」

「お前は！」

痛みもなくなったので、俺は仕切りなおして再び立ち上がった。俺は怒っている。本気で怒っているんだ。ちよつと失敗して脱線したけど、心の底から怒っているんだ。

「お前はなんでそう勝手なことをするんだ！ 俺の意思は無視か、スルーか、必要ないのか！」

「俺は……」

「ちゃんとお伺いを立てろ！ 先に聞け！ 俺にも準備ってものがあるんだ！ こんなに突然じゃ何にも持って来れなかっただろ！ 前もってわかってたら中途半端に残してなんかこなかったのに！ 俺の宝物たちをどうしてくれる！」

和樹の目が驚いたように開かれる。

俺はそれを忌々しく見下ろした。くそっ、なんでだ。なんでだよ。

「兄、さ……」

「そうだ俺は兄ちゃんだ、お前の兄だ！ なのにどうして無理やり落とさないと俺が来ないみたいに言うんだよ、そんなはずないだろ！ 俺の過去を見たんだろ、知ったんだろ！ だったらわかるだろ、

俺がこっちに来ないはずがないんだよ!!」

もちろん、最初から「そっちに戻れないから、こっちの異世界に来てほしい」なんて言われても、俺は絶対信じなかった。目の前に現実を突きつけられない限り、俺は信じない。夢物語が好物のくせに、俺にはそういう頭の固いところがある。

しかもこちらには二次元文化がない。ゲームも漫画もパソコンも小説もテレビも何もない。電化製品らしいものは見当たらない。

とてもどこかで、猥雑で、不便で、不衛生で、危険で、何が起きるかわからなくて、本の種類が少なくて、いろんなことがすごく面倒だ。

でも、それを補って余りあるほど魅力的な魔法という文化がある。素っ裸の怪しい俺に、手を差し伸べてくれた優しい人もいる。エリクサーもある。

そしてなによりも、ずっと心の片隅で願っていたことが叶うのだ。俺が離してしまった手を、もう一度繋ぐことができる。

それがどんなに重要なことか、お前がわからないなんて嘘だ。

無理やり呼んで良かったんだ。それでいいんだ。

後ろめたく思う必要なんてないんだ。

矛盾しているのは自分でもわかっている。

突然呼ばれたのは腹が立った。やはりひとこと、たとえば俺が信じなかったとしても声をかけて欲しかったというのが本当のところだ。でもそんなことは些細なことなんだ。

和樹は間違えてる。

俺の意思なんか関係ないふりをして、自分が戻れないから落としてやったんだと強がって、すっかり怯えていたら世話がない。馬鹿め。

ただ会いたかったんだと、どうしても会いたかったんだと、ごめんなさいと言えばそれでよかったのに。

俺だって、お前が生きていると知っていたなら会いたいと思うに決まってるだろ。

父さんがいなくなって、俺はしみじみと自分が馬鹿だったことを思い知ったところだったんだ。

俺は自分さえよければいいんだとつっぱってただけの小さい男だった。

一人と独りは違うんだ。

俺だって、独りは嫌なんだ。

お前と同じなんだ。

「俺の過去まで勝手に見やがって、そのくせなんだよそれ。しかも考えも読めるんだろ、どうせ今も読んでるんだろ。だったらわかるだろ」

「もう読んでない。本当に、約束したときから読んでない。嘘じゃないよ」

「でも俺の過去は全部知ってるんだろ。俺の考え方もわかるだろ。だったらそれくらいわかれよ」

「行動した経験を知ることとはできても、そのときの思考まではわからないんだ。だから、何を考えて……」

「ぐだぐだうるさいな、いいからわかれよ。わかるだろ。本当はもうわかってるんだろ」

俺が睨みつけると、和樹は顔を歪ませて、それでも笑った。

「……俺に都合のいい答えて、いいのかな」

「いいんだよ、そう言ってるだろさっきから。いいか、俺はお前の兄だぞ。兄ちゃんだ。方法がどうだろうと、お前に会いたくないは

ずがないだろ。まったく言わせんな恥ずかしい」

「ごめん兄さん。ごめんなさい」

「それでいいんだよ。さっさとわかれよこの馬鹿。馬鹿め。愚弟め。露悪的な言い方しやがって馬鹿が。男だろうと女だろうと、人間は素直クールが一番なんだよ。いいな。二度はないぞ。わかったな。それとお前は弟だからな、兄の言うことは絶対だ。聞かないとだめなんだ。そう法律で決まってるんだ。わかったな。わかったらはいと言え」

「はい、兄さん」

「よし。じゃあその絶対防御を一度解除しろ。とりあえず一発殴る。話はそれからだ」

「はい、兄さん」

和樹は白い手袋を脱いでさらに腕輪を取り外し、居住まいを正した。

これから殴られるというのに、いやに嬉しそうだ。俺は氣勢が逸らされそうになるのをぐっとこらえて、仁王立ちをする。

「解除したか？」

「はい、兄さん」

俺は右手を振り上げ、平手で和樹の頬を叩いた。

パシッ。

……なんとも情けない音がした。

ち、違うんだ、手加減をするほど俺は生易しい男じゃないぞ。

さっき思い切りやったせいで骨が折れるかと思うほど痛かったから力が抜けてしまったんだ、ただそれだけだ。手心なんて全然加えてなんかないんだからな。だからそんなキラキラした笑顔で叩かれた頬を撫でながら「兄さんは優しいね」とか言うな！ ゾワッとす

るからやめろ！ うっとりすんな！
いっただいこの誰だこいつを
こなふうに育てたのは！

20..後光

俺たちは再び正座をして向き合った。

膝を揃え、背筋をピッと伸ばして座ることによって、気持ちを引き締める効果が発生する正座は偉大だ。

真面目を装った場の空気のを借りて、俺はどうしても譲れない一線を訥々と訴えた。

「兄ちゃんはこの世界で生きていくのに異存はない。異存はないが、いくつか確認と要求がある。えー、お前の、その……天恵なんだけど。どうにもならないのか？ 考えを読まれてんのかもな」と疑いながら生活するのは、ちょっとなあ……。いや、そのな？ お前が本当に読んでないでしょう。それでも、そうだとしても疑ってしまうのが俺なんだ。信じる、と口で言うのは簡単だけど、嘘だってわかるだろ、読めば。だから……」

俺は言葉を重ねながら、自分の台詞にずんずん落ち込んでいった。お前が何と言おうと、俺はお前を信じられない——そう言っているのも同然なのだ。最低だ。我ながら小者過ぎて嫌になる。

和樹は読まない、読んでないと言ってくれたが、だからといって俺がそれを信じる、と本心から言うのはとても、とても難しいことだった。自分の姿に見惚れながら、細かな設定やシチュエーションを妄想してグフグフニヤニヤすることも出来なくなってしまうのはかなりキツイ。あ、いや、もちろんそれだけじゃないよ。ないですとも。

驚くべきことに、和樹はいまのところ俺のそんな性癖さえ許容範

囲内であるようだ。こんなに至らない兄なのに、慕ってくれていることは十分に伝わってくる。いろいろ問題はあるけど、まあいい弟だ。さすが御使い様なんてものをやっているだけのことはある。

しかし今はそうでも、これから先はどうだろう。いつ幻滅されるかわかったもんじゃないことは、自分が一番よく知っている。呆れ果てて見捨てられるのも時間の問題だ。俺は昔からマイナスポイントを積み重ねることに關しては超一流なんだよね、ははははは。

弟に虫けらを見るような目で見下ろされたらさすがの俺も心が折れるよ、ポッキリだよ。軽蔑されるのは慣れているが、やっと会えた身内にまでそんな視線を向けられたら立ち直れない。

ようするに読まれたくないんだ。嫌なもんは嫌なんだ。

たったそれだけのことなのに胸の内でぐるぐる自己弁護していると、和樹は申し訳なさそうに微笑んだ。

「ごめんね、兄さん。いいんだよ、わかってる。こんな力を持っていることがどういふことかなんて、最初からわかってたんだ」

「……ごめん」

「違うんだ、俺は嬉しいんだよ。兄さんはやっぱり誠実だになって、さすが兄さんだなんて感動してた。でも……だからこそ、俺も黙ってはいられなかったんだけどね」

意図がわからず俺が首を傾げると、和樹は視線をうろつかせて、結局うつむいてぼそぼそと呟いた。

「遅かれ早かれ、俺は兄さんに対して天恵を使っちゃったことだよ。来訪のアクシデントがなくても兄さんの過去を暴いただろうし、思考を読むことも我慢できるとは思えなかったから。その、……心配だったんだ。兄さんが俺を、どんな風に思うのか、思っていたのか

って。本当は黙っていいようかとも考えたよ。でも、兄さんの記憶を知ったから……俺は受け入れてもらえるほうに、賭けたんだ」

「……その、悪い……」

「違うよ、俺は賭けに勝ったんだよ？　どう言えば伝わるのかな、すごく嬉しいんだ。兄さんは俺を弟と認めてくれて、普通に怒ってくれて、話を聞いてくれて……嬉しくて嬉しくて、それ以外に言葉が見つからないくらい嬉しいんだよ」

「そんな大げさな……。っーかわかってんのか？　俺はお前を信じられないと言ってたぞ？」

「うん、ありがとう。当たり前のことを、普通に言ってもらえてすごく嬉しいよ」

何この生き物。ずれてる。ずれてるよ。すれてないにしてもほどがあるだろ。こっちで育つとこんな真摯に成長すんの？　あっちで育った俺の下種っばさが際立つんだけど。

「お前なあ、違うだろ。そこはこう、なんていうかだな――」

「兄さんこそ、もっと殴ったり蹴ったり、非難したり罵倒したりしなくていいの？　俺はたとえ殺されても文句言わないし、反抗しないよ」

「はあっ!？」

「あははは、そこで驚くんだね。やっぱり兄さんはすごいなあ」

「当たり前だろ、何言ってたんだ。頭大丈夫か？」

「俺はね、弟じゃないと拒絶されて、化け物だと怯えられて、二度と会いたくないと疎まれることも覚悟してたから。それが杞憂で終わったことがどれほど嬉しいか、どうしたら兄さんにわかってもらえるかな……」

和樹はかすかに目を潤ませて微笑んでいる。俺は呆氣に取られて二の句を告げなかった。

いやー、その発想はなかったわ。うん、全然なかった。言われてはじめてそういう可能性もあったことに気付いたくらいだ。我ながらびっくりするほど、そんなこと露ほども考えなかったなあ。

そう言われてみると、なんだか俺っていいやつじゃね？　すごくしっかり兄っぽい態度を取れてる気がしてきた。実は自分で思っているよりも兄らしい行動がちゃんとできてるんじゃないか？　なんだそうか、そうだったんだ。俺、ちゃんと兄らしくできてたんだな。そっか、そっか……。

じんわりと全身に充足感が広がっていく。一度失った『兄』というアイデンティティが、他でもない『弟』に認められて再びこの手にかえってきた喜びは、思いがけず俺を深く満たしてくれた。

「それに安心して、兄さん。読めなくする方法はあるから」

「ちよっ、マジか！？　ふざけんな馬鹿！　あるんだったら先に言えよ！　俺がどんだけ悩んだと思ってんだ！」

「あはは、ごめんね。少し待ってて」

和樹は先ほど取り外した腕輪を手に、裏側にあたる部分を指でこすったり、捻って伸ばしたりと弄り始めた。

興味深くその様子を見つめつつ、俺はがっくりと肩を落としていた。

なんだよ、俺の苦悩は一体なんだったんだ。傷つきやすいマイハートに無駄に負荷をかけるとかマジやめてくれ。もうエリクサーもないんだから、耐久ポイントをゴリゴリ減らしても元に戻らないんだぞ。俺のMPまでゼロになるよ？　頼むよほんと。

「こんなものかな。兄さん、腕を出して」

左腕を差し出すと、微妙に変形した輪っかが通された。

和樹が両手でそれを包み込む。ふわりと白いエフェクトが発光し、手首には腕輪がぴったり張り付いていた。

「元が俺専用だから万全ではないけど……うん、天恵は無効化されてるね。でも反射判定の調整が済んでないから気をつけて。とりあえずこれで過ごして、近いうちに兄さんの用途にあったものを一緒に作ろうよ」

「おお、作る作る！　ぜひ教えて！」

わー、マジックアイテムが製作できるなんて夢みたいだ。胸が熱くなるなあ。一体どういう仕組みになってるんだろ。赤いので3倍の効力を発揮できるものとか作れるんだろうか。

俺はつるつるした白い腕輪を撫でた。リストバンドのように厚みのある幅広の形で、ところどころへこんでる以外は装飾らしいものはなく、のっぺりとしている。せっかくの守りの腕輪だというのに、なんだかすぐくちゃちで安っぽい素材だ。これはあれだ、現代ならよく見るあれにそっくりだ。

「なあ、これプラ？　プラスチック？」

「^{ルージュ}光珠という宝玉でできているんだよ。魔法陣にとっても適しているんだ」

「へえー。宝玉って、宝石かなんかか？　意外と高いとか？」

「うん、それなりに」

……あれ？　見た目は夜店のオモチャのような輪っかのくせに、もしかしてこれってかなりいいお値段なのか？

和樹はあのでかい金貨をほいほいあげたりできるくらいだから、間違いなく金持ちだろう。そういうやつのもそれなりってどんなだよ。あー、聞きたいような、聞きたくないような、聞きたいような……いや、やっぱり怖いからやめとこう。気軽に腕も振れなくなりそう

だ。余計な情報は仕入れないことにしよう。そうしよう。

「お前、ちゃんと貯金はしてるんだろうな？」

「うーん、そんなに貯まってないかも……」

「なん、だと？ お前、偉いんだろ？ 給料は？」

ピシッと音がして俺の未来設計にひびが入った。どういうことだ、金銭に関しては全面的に寄りかかっていい暮らしを満喫しようと思っていたのに。

王様とか守ったりしてるってサナさんが言ってたし、絶対に高額所得者だよな？ 頼むよ、俺は働きたくなどないでござるよ。

「俺への支給は光珠にしてもらってたんだ。その……、帰還用の魔法陣を作るのにたくさん必要だったから。でもここ2年ほどは貨幣でもらってたし、生活に困ることはないよ」

「本当か？ 俺が居候しても平気なくらいはあるんだろうな？」

「うん。そんなに贅沢をしなければ、一生養ってあげられると思う」

俺はほっとして安堵のため息を付いた。いまの時点で一生とか言えるほどあるのだ。アホほどあるってことだ。あーよかった。持つべきものは金持ちの弟だなあ、兄ちゃん嬉しいよ。

やっぱりどこの世界であろうと人間社会では金がものをいうのだ。守銭奴と罵られようが、俺は金が大好きだ。父さんの保険金を切り崩していくだけのニート生活の不安と罪悪感の半端なかったからな。お金って本当に大事だよ、うんうん。

「それなら、サナさんとクルークに借りたお金を返したいんだけど、お前立て替えといってくれる？」

「うん。お礼も含めて後で渡しておくね」

おお、なんと力強いおこたえ！ 後光だ、和樹が金色に光って見えるよ！

「いやーよかったよかった。なんかすっごい高い宿に泊められまくってさ、どうやって返そうかと悩んでたんだよ。あー助かった」。いや、俺だって一応魔法が使えるっばいし、それで稼ごうとも思ってたんだけどさ。神子様（笑）とか言われて跪かれないようにするにはどうしようって難問が……あ、そうそう、俺は絶対に御使い様役はやらないからな。お前はがんばったらいいと思うけど。なんか向いてそうだし」

「別に俺も、向いているからやってたわけじゃないんだけどな」

和樹は苦笑して謙遜するけど、俺はハイハイと受け流した。さっきもすげー平然としてたくせによく言うよ。慣れだとしても慣れるまで耐えられるのがすごいよ。兄ちゃんにはもはや尊敬の域だったよ。あの人々の渴望した殺人視線の中を歩くとか無理すぎる。

「あと、お前の先生には会うけど、それ以外の偉い人には会いたくないからな。王様とか大臣とか、とにかく肩書きのでかい奴は絶対に嫌だ。絶対だ。俺は権力に弱いし長いものには巻かれる主義だ。てのに、なんでか嫌われて最悪な……まあ、お前は知ってるか。だから目立たず騒がれず善良な一般市民として、庭のある一軒家で犬を飼って縁側で茶でも飲みながら楽しくラクして好きなことだけしてのんびりダラダラ暮らしたい。それが俺の夢だ」

「うーん……、うん。わかった。なんとかする」

「ぜひなんとかしてくれ。頼んだぞ弟よ」

「はい、兄さん」

俺が勢い込んでぎゅっと手を握ると、和樹はすごく嬉しそうに笑って握り返してきた。

確かに俺は自分の意思でこちらの世界を承諾したが、こいつもけっこう自己中に行動したことは事実なんだ。叙情酌量の余地がありまくるとはいえ、責任がまったくないとは言えないよな。一生とまでは言わないから、こっちの生活に慣れるまで面倒をみてもらっても罰は当たるまい。

ぐっふっふ、異世界でもニート上等。俺はプライドよりも目先の利を優先するのだ。

「そういや、いまどこに向かってるんだ？ お前の家？」

足がしびれてきたので、俺は正座を崩した。

揺れない馬車はまだ夜空を突っ切っており、幌の隙間から見える空は真っ暗で何もわからない。

宿を出てから随分時間が経っている。俺の体内時計によれば、そろそろ深夜に差し掛かる頃合だ。小腹が減ってきてインスタントラーメンを食べようか我慢しようか葛藤する時間帯。ああラーメン食いたいなあ。トンコツ醤油の美味いっちゃんが懐かしい。

「えっと、もう少しかかるかな」

「目的地は？」

「王都にある先生の家だよ」

「なんだ、お前の家じゃないのか」

「俺はほとんど研究所で暮らしてたからね。その……王城の端にあるんだ。最初はそこに向かっていたんだけど」

「あー」

そうか、俺が権力者には絶対会いたくないと言ったから変更したんだな。

「でもいいのか？ こんな夜分に突然訪ねても」

「平気だよ。俺の家と言えないこともないし」

「ふーん？」

「俺のこちらでの名前、覚えてる？」

「……アヴェエ、ナントカ、カージユ？」

「アヴェエ・ト・カルフ・カージユ。アヴェエは家名、カージユは名前。ト・カルフはカルフ家が後見人ですってことなんだ。カルフは先生の家名だよ」

「ほほう、なるほどなるほど」

本当に家族同然のお付き合いなんだな。よかった、こっちでも弟にそういう人がいたことは僥倖だ。

でもやばい、ちょっと緊張してきたぞ。まだ先のことだと思ってたのに、まさか今夜の今夜とは思ってもみなかったぜ。どどうしよう。

「何も手土産持ってきてないんだけどいいのかな。先生ってどんな偉いんだ？ 礼儀作法とか練習したほうがいいよな？ 挨拶はどうする？ 本日はお日柄も良くとか言えればいいのか？」

「あはは、普通にしてて大丈夫だよ。先生はわかりやすい人だから。兄さんは、うん、ちょっと……怒るかもしれないけど」

「はあ？」

「会えばわかるよ」

なにその不吉なフラグ。そういうのいらないんだけど。

21…お貴族様のお屋敷

「兄さん、そろそろ着くよ」

和樹はおもむろに白いローブを脱いで小さく丸めた。脱皮した弟は、その下にもローブを着ていた。体にフィットした紺色のものだ。なんで二枚もローブを着てるんだろう。そんなにローブが好きなかな。それを脱いでもまだローブとか言わないだろうな。

俺は偉い人と会うという緊張感に耐え切れなかったことによって起動した自己防衛システム——ようするに襲い来る眠気と闘いながら、ぼんやりとそんなことを考えていた。

ふと体が揺れた。荷台の角度が変わったのだ。幌の隙間から顔を出してみると、馬車は下降を始めていた。

一軒の大きなお屋敷に向けてぐんぐん近づいていく。あれがカルフ先生の家なんだろう。庭には二羽のニワトリはいないようだったが、代わりにぽつぽつと小さな光が灯っていて、その呆れるほどの広さを浮き上がらせていた。隣の家が見えないほど広いつてこれ本当に私有地？ 回覧板を持って行くのにもひと苦労しそうだ。

ひとときわ明るい玄関にほど近い場所へ回り込むように移動して、馬車はついに地に足をつけた。

「うわー……」

上から見てもでかかったが、下から見るとそうとうでかい。まさにお屋敷。コの字型の建物は、両端に尖塔のようなものが伸びている。いくつか窓から明かりがこぼれているので、まだ起きている人

がいるようだ。

厩舎係だろうか、男がやってきてクルークから手綱を預かっている。

俺は幌の隙間から、気まずさを感じつつそれを見ていた。

なんといっても、ここに来るまでの間に喚いたり怒鳴ったり暴露されたりと、かなりの醜態をさらしまくったのだ。クルークには会話の半分くらい意味がわからなかっただろうが、残りの半分は理解したはずだ。きっと呆れているに違いない。

立ったり倒れたり悶絶したりと忙しかったので注意を払わなかったけど、正気に戻った今はもう荷台から出たくない。あーどうしよう。どうやって誤魔化そう。

「兄さん、行こう」

「う。そう、だな……」

「どうかした？」

「いや、ほら。あれだけ騒いだから、ちょっと会わせる顔がないっつーか……」

「なんだ、平気だよ」

「なんだとはなんだ。お前はいいかもしれないけどな、俺にとっては――」

「俺たちの話は聞こえてないよ。荷台から声が漏れないようにしておいたから」

「なん……だと？」

それを最初に言えよ！ お前は どうして そう事後承諾ばかりなんだよ！ ストレスで寝込ませる気か！

俺は弟が差し出した手を無視して、荷台からひよいと飛び降りた。まったく、気を揉んだのが馬鹿みたいだ。なんだか今夜はこんなものばかりだ。

でもよかった、あーよかった。クルークには聞こえてなかったのか、そうかそうか。

俺は大きく胸を撫で下ろした。しかし魔法って本当に便利だな。落ち着いたらいろいろ教えてもらおう。試したいこともあるし。

「お疲れさま」

和樹は厩舎へと向かう馬を労った。白い光が馬を包み込む。

馬丁が胸に手を当て、恭しく頭を下げてから引き連れて行った。

「お前、いいのか？」

「ん？ 何？」

「何って、魔法の色が……」

「ああ、ここにいる人たちはみんな知ってるから。大丈夫だよ」

「……あーそう。ああそう、そうですかそうですか」

「えっと、兄さん？」

「わかった。もうわかったぞ。お前のことは今後一切、なんの心配もしてやらない」

どうせ俺が考えつくようなことは、すでに解決済みだったり平気だったりしてもよかったりするんだろ。ない知恵絞って頭捻るだけ無駄ってことですわわかります。もう突っ込んでなんかやるもんか。こんなやつ心配するだけ無駄だ無駄。

到着したという安心感と緊張感、さらに疲労や心労などいろんなものがないまぜになったことで、俺のイライラは簡単に限界突破した。静かに佇んでいたクルークの腕をむんずと掴むと、和樹を放つてずかずかと先に進む。

「ごめん兄さん。ごめんなさい」

慌てたように和樹が追いつがってくるが、その顔は笑み崩れ、声も弾んでいた。なんだよそれ。なんでそのチョイスなんだ、おかしいだろ。

「お前、全然謝る気ないな」

「だって兄さんが俺を心配してくれたんだよ。嬉しくないはずがないよ」

「馬鹿。お前は馬鹿だ」

「あはは。うん、そうだね」

あーもう、あっさり肯定すんな！ 俺が惨めになるだろ！ 新手のイジメか！

和樹は嬉しさを前面に押し出しながら、そっぽを向いた俺の前に回って軽い足取りで玄関へと先導した。大きな扉が重々しく開かれ、眩しいほどの光があふれた。

目を細めて高い天井を見上げると、でっかいキラキラしたシャンデリアがドーンとぶら下がっている。それも5つも。これだけあればそりゃ明るいよ。こんなの実際に使ってるのはじめて見たなあ。どうやって掃除するんだろ。

エントランスホールだろう場所には、洋画で見たことのあるような光景が広がっていた。左右の階段は緩やかにカーブを描き、手の込んだ柄の絨毯が敷いてある。足元はピカピカに磨かれた大理石っぽい床で、派手な模様の壁には精密な風景画がかかっていた。なんというか、全体的にとっても煌びやかだ。豪華絢爛だ。いかにもお貴族様のお屋敷然としている。

「おかえりなさいませ、カージュ様」

「ただいま、ジルユーフ・パスフィス。客室をふたつ用意してくれ

るかな」

「かしこまりました。——ようこそいらっしゃいました。お荷物をお持ちいたします」

目をシパシパさせている俺を出迎えてくれたのは年配の男だった。丁寧に頭を下げる様子はまさにエレガント。夜も遅いというのに、ビシッと格式張った服を着こなし、淡いベージュの髪は乱れなく後ろに撫で付けている。

執事だ。これは執事に違いない。ということは、きっとどこかにメイドもいるはずだ。どこだ、どこにいるんだ生メイドは。もう寝てるのかな。

きよろきよろと広い玄関を見回したとき、音もなく二階中央の扉が開いた。

「何事だ」

掠れた、しかし力強い声が響いた。出てきたのは小柄な老人だった。和樹と同じ紺のローブを羽織っているが、たくさん飾りがついているので偉そうな装いだ。危なげない足取りで階段を降りて来る様子は、あまりにも颯爽としすぎていてギョツとした。落ち着いた動作でありながら、早まわしのように敏速だったのだ。

「こちらに来るとは、どういう風の吹き回しだ」

「先生にご挨拶したくて」

「ふん、しらじらしい。……それが兄か」

「いえ、彼は恩人のレスル・クルークです。こちらが兄の瑞樹。兄さん、この人が俺の先生だよ」

やっぱり、と思うと同時に落胆した。

俺はなんとなく、もう少し若い柔かな人を想像していた。できれ

ば母性溢れた優しい人がいいな、なんていうかすかな希望を持っていたのに、一撃で叩き壊されてしまった。

俺が怒るかもなんて前フリも、手の上で転がされるようにあしらわれてニヤニヤムキーとか、そういうのを思い描いていたのに、まったくもって甘い考えだったようだ。

でも和樹がこんなに掴みどころのない人格に育ってるんだぞ、きつと似たようなのらりくらりとした天然素材だと思い込んでも仕方ないだろ。

それが正統派の、いかにも取っ付きにくそうでプレッシャーをビンビン発する神経質っぽい頑固ジジイだとは……弱ったな、こういう人苦手なんだよなあ。手に汗かいてきた。

ほぼ同じ身長だったので、俺はビクビクと、老人はマジマジと見つめ合った。

老人は立ち姿はシャキツとしているが、かなりの年配だという印象を受けた。齢80を超えていると言われても納得しそうだ。しかし灰色の頭髮はまだまだ豊かで、紺のリボンでひとまとめにして肩に流している。鷲鼻がぐつと顔の中央で主張し、さながら猛禽類のようだ。鈍い金色のモノクルを右目に填め、落ち窪んだブルーグレイの瞳がギョロリと動いて俺の全身を観察した。

「あ、あの、安部瑞樹です。このたびは——」

「私はカルフ・レ・グーレアス・サグヴィだ。ふむ……、どうみても女子^{おなじ}だが、兄とはな。いいだろう、来なさい」

「はっ？ えっ、と」

「駄目ですよ先生。もう遅いし、兄さんは疲れている。お話は明日です」

和樹が間髪入れずに否定したとたん、老人ははっきりと渋面になった。元から愛想がいいとは言えない顔が、さらに気難しさを際立

たせている。こ、怖ええええ。

「私は忙しいのだ。明日はお前の兄どころではない」

「角蟻ホーエンでしょう？ 手伝いますよ」

「手伝うだと……？ お前がか？」

「ええ、俺が手伝います。だから話は明日、昼食後です」

「いいだろう」

老人はあっさりと引き下がると、用は済んだとばかりにさっと踵を返した。啞然としている俺の前を通り過ぎて、ちらりとクルークに目を走らせる。

「ふん、上手くやったものだな」

捨て台詞を吐いて階段を登り、こちらを省みることなく元いた扉の向こうへと消えるジジイを、俺は呆けた顔で見送ってしまった。

和樹を見上げ、上手く言葉にできない憤りのために口をパクパクさせると、わかっていてもいうように背中を押された。

「うん。言いたいことはわかるけど、まず部屋に案内するね」

和樹は相変わらず笑っているし、クルークさえも平然としている。

しかし俺はそれを許容できない。できるはずがないだろ！ なに

あれ、なんだあれ、なんなんだよあれ！

あんなのが和樹の先生で、親代わりだったってのか？ 上手くや

ったってのはなんだ、どういうことだ！ 何様のつもりだクソジジ

イめ！ ワシはお貴族様で王宮の偉い魔術師様だから傲慢で当然

なのだよ愚民どもがってか？ くそっふざけんな、知るかボケ！

たったひとりの6属性だろうがなんだろうが、俺は認めない！ 絶

対に認めないからな！

22..誤解(前書き)

キーワードを編集しました。

【残酷な描写あり】 【萌え分極少】 【主人公の嫁は自分】 【ほのぼの】

以上のタグが追加となっております。
ご了承ください。

22..誤解

小鳥の鳴き声が聞こえる。

空は透き通るような青一色に染められ、中天を過ぎ行く太陽が元気に陽光を振りまいている。

曇り空を愛する俺には鬱陶しいほどに、今日もいい天気だった。

無駄に広いテラスの日陰となった一郭で、繊細な作りの椅子に腰を掛け、完璧な計算で配置された幾何学模様の庭園に目を向けるでもなく、俺は気だるくもそもそ朝食兼昼食を取っていた。

隣席のクルークも食することに専念している。彼は俺の大神人のひとりなので、和樹が大切なお客様としてもてなされるように計らってくれたのだ。さすが俺の弟、心配りもばっちりだ。

主に心因性の疲労を回復するためにたくさんの睡眠を必要とした俺とは違い、クルークはいつものように早朝から起きていたそうなので兼用ではないただの昼食だった。

豪勢なご馳走を前に目を輝かせることもなく、気後れするでもなく、普段どおりに次々と平らげている。食えるときに食うのが仕事だ、とでも言い出しそうな落ち着いた態度が羨ましい。傭兵になればこんなふうに泰然自若となれるのかなあ。それならちょっとなってみたい気がしないでもないけど、もちろん思っただけのことです、ハイ。

ぽかぽかとぬるま湯のような陽気の中、気が抜けて締まりのない囁りが響き渡る。

ピューヒュロロロ。

あー、そういや子供の頃にこんな音が出る鳥型のオモチャを持ってたなあ。水入れて吹くだけのチープな笛。風呂場でピューピュイ吹いてた覚えがあるけど、あれどうしたんだっけ……。

ピューヒュロロロ。

天然のヒーリングミュージックが長閑な音色を紡ぐ。脱力感を誘うまったりとした旋律に浸りながら、俺はいつこうに量の減らない皿を見下ろした。

丸テーブルのところ狭しと並べられた手の込んだ料理は、まだ半分以上残っていた。柔らかいパンに、一口大の肉を果実酒で煮込んだシチュー、マリネっぽいもの、テリーヌのように形成されたものや、グリルした肉の塊をスライスしたものなど様々だ。付け合せの野菜も彩りよく、一品一品丁寧に盛り付けられている。香辛料もふんだんに使われていて、濃厚なソースの芳醇な味わいが肉の旨みとほどよくマッチしていた。こちらに来てからで言えば、これまでで二番目に美味しい食事だ。

うん、確かに美味しい。美味しいことは美味しいんだけど、まだ起きて間もない俺にこんなこってりしたランチはさすがにどうかと思うんだ。

のろのろと手を動かして黒いマッシュルームもどきを口に入れる。もにゅもにゅとした触感は悪くないが、べったりとバターが染みてて少しくどい。

あーもう無理だ、限界だ。俺は二股フォークを皿に置き、パンを千切って脂っこい口の中を押し流した。

料理の量はそれほどでもないのだが、まだ目覚めていない胃にこ

のメニューは重い。重いよシェフ、もつとさっぱりしたものの増やそうよ。たとえばそうめんとか。うどんもいいな。つるつとしたものなら入りそうだ。

手の届かない食材たちを夢想しながら、俺はだらしなく背もたれに体重を預け、コルセットに固められたお腹をゆるゆると擦った。

サナさんにもらった他の薬の中に胃腸薬はなかった気がする。あーあ、エリクサーを飲み干すなんて馬鹿なことするんじゃないかな。サナさんは今どこにいるんだろう。もう村を出発したんだろうか。また最初みたいに話してくれるといいのになあ。やっぱり無理かな。まあ、たぶん無理だろうなあ。サナさんはそういうところ、ちよつとかたくな感じだったし。

俺は数日前のことをすでに懐かしく思いながら、深く嘆息した。ああ、いろんな意味で胃が痛い。

「どうかしましたか」

クルークが食べる手を休めて、俺に視線を向けた。

「や、別になんでもないです。お腹がいっぱいでどうしようかなーと……あ、よかったらこれも食べます?」

彼の皿はほとんど攻略され尽くしていて、残るはあと1品となっていた。この分ならもう何皿かいけるんじゃないかな。

俺は手をつけていない料理を押しやろうとしたが、横からスッと伸びてきた腕がそれを遮って、ひょいと肉の皿を取り上げた。

「俺がもらってもいいかな? お腹空いてるんだ」

「おっ、お前どっから出た!？」

「あはは」

唐突に和樹が現れたので、椅子ごと仰け反った俺はあやうく転倒しそうになったところを支えられて事なきを得た。ふう、やれやれだぜ。

エフェクトの残滓を纏っているから魔法で現れたのだろうが、まったく心臓に悪い登場の仕方だ。

弟は右手に新たなエフェクトを光らせて、俺たちが座っているのと寸分変わらない椅子を出して腰掛けた。

「この館の中で、俺に行けない場所はないよ」

「そういう問題じゃないだろ。いきなり現れるのはやめてくれ」

びじるから。と喉まで出かったが、兄の威厳を保つために飲み込む。

「えっと、先に知らせればいい？」

「は？ どうやって？」

（――もちろん、こうして）

「うひっ！？ いい、いいからもういきなり現れろ！」

うおお、頭がゾワゾワする。どうも念話には慣れそうにないな。

脳内に届く声はエコーように微妙な反響もあって、むず痒いような違和感があるのだ。

和樹は俺の皿を引き寄せるとぱくぱくと食べ始めた。とうに冷めてしまっているのに、よほど腹が減ってるのか美味しそうに食べている。

俺はもったいないおぼけに取り付かれているので、食べ物が無駄

にならなくてよかったと思いつながら食後のお茶を注いだ。給仕の人がいると緊張するので全員下がってもらっているため、ポットのお茶はずいぶんとぬるくなっていた。猫舌なのでがぶがぶ飲めて丁度いい。

「お前、あのジジイを手伝ってきたんだよね？ 何だったんだ？」

昨夜の会話を思い出すとどうもややもやする。俺は話の裏を読むとかできないけど、取引っぽいことくらいはわかった。和樹が手伝うって言ったただけであのジジイは態度を軟化させたもんなあ。一体どういう師弟関係なんだか。

今はもう、ジジイに対しての怒りは鎮火している。俺は一晩寝てしまえば、負の感情がきれいさっぱりとまではいかないとしろ、大部分が消え失せてしまう性質なのだ。痛みや恨みなどの根深いものとは違って、怒り続けるというのはけっこう難しい。

とはいえあのジジイの好感度は1ポイントも増えてないし、いけ好かないイヤな野郎であることは変わらないけどな。

「違うよ、兄さん」

「ん？ 手伝ってきたんじゃないのか」

「そうじゃなくて、ジジイじゃないよ」

「はっ？」

「先生は女性だよ。兄さんのその服だって先生のものだし」

「……へっ？」

似合ってるね、とにこにこ笑う和樹。

デザートの果物のパイを頬張るクルーク。

馬鹿みたいに口をぱかーんと開ける俺。

ピューヒュロロ。

またどこかで鳥が鳴いた。

えっ？ ええっ！？ だってどう見ても頑固ジジイだったぞ！？
あれがまさか頑固ババアだったって言うのか？ マジで？ しか
もこの服がお下がりだと！？

俺は胸元の小さなレースを摘んだ。襟も袖もぴったり包み込むモ
ンタントなデザインで、スカートの裾も長く清楚な雰囲気、いわ
ゆるアフタヌーンドレスだ。鏡に映った俺の嫁のあまりの可愛さに、
着用の抵抗感なんて宇宙の果てまで吹っ飛ぶほど可憐な装いだ。

ただ飾り気はほとんどなく、たしかに地味なのであの年代が着て
も平気なのかもしれないが……いやいや、やっぱり詐欺だろう。だ
ってすげーびったりだよ？ 俺けっこう胸あるのに全然苦しくない
し、ウエストだって細いのに余裕がないんだぞ。こういうことだ。

ちょっと怖い考えが浮かんだので、頭をぶんぶん振って想像しか
けた幻影を蹴散らした。ははは、そんなまさか。そんなことあるわ
けないよな、あの豪華なローブの下がボンキュッボンなんて。嘘だ。
嘘に決まってる。いくらなんでもヒトヒトのトナカイ飼ってた女医
みたいにナイスバディなわけがない。誰か嘘だといってくれ。

だ、駄目だ、これはちよつと置いておこう。俺には荷が勝ちすぎ
る。うん。

俺は何度も頭を振って、ぞつとしないイメージをなんとか追い払
った。

と、とにかく、たとえ奴が女だろうと何の関係もないのだ。俺は
フェミニストではないし、男女平等を謳う前衛的な教育を受けてい
る。一度下した評価がそんなことで覆るはずもない。ジジイだろう
とババアだろうと、どのみち範囲外の三次元。いやな奴はいやな奴。
それ以上でもそれ以下でもない。

「うん、まあえーと、それはともかくだ。手伝ってなんだったんだ？」

「ちょっと分解しただけだよ」

「分解？ 何を？」

「うーん……」

「……言えないようなことなのか？」

「そうじゃなくて、兄さんの苦手な話だと思うから」

「は？」

俺の苦手な分解の話？ 因数分解か？ 俺は根っからの文系だから、数学はどれもこれも苦手なんだけど。

「なに、難しい話？」

「んー。兄さんは、こちらに魔物がいることは知ってるよね」

「ああ、うん。見たことないけどな」

できるなら今後も見たくはない。遠く安全なところで、もしくは完全防御バスみたいなもので魔物ウォッチングとしゃれこめるなら、それならちよつと好奇心が疼いたりしないこともない。

……いや、やっぱり今のなし。ナシナシ。

下手にフラグを立てるとその土地にはいないはずの強い魔物が人を襲ってるところに出くわしたり、バスがひしゃげるようなやつが出来てきたりとかするかもしれないからな。俺は魔物なんて全然興味なんかないですよ、ないですからね。

白属性はどうやら強い魔法を使えるようだけど、俺はいざというときに自分が役に立てるなんて過信はまったくしていないのだ。主にメンタル的な意味で無理です。

「つーか魔物を分解ってなんだ？ 退治じゃなくて？」

「うん。先生がね、ずっと前から手に入れたがっていた魔物がいて、それがようやく罠に引っかけたんだよ。弱らせるのに時間がかかったらしくて、到着が今朝だったんだ」

「ふーん。どんな魔物なんだ？」

「角蟻っていう、長い角があって、蟻をすごく大きくしたみたいな硬い魔物だよ。解体に時間を取られるってばやいてたから、ちょっと手を貸してきた」

「なるほど、だから分解か。……ん、それだけ？」

「うん、それだけ」

なんだ、そんなことだったのか。言い洩るから何事かと思ったよ。いくらスプラッタが苦手な俺でも、それくらいならどうってことないのに。そう、お話を聞いただけならどうってことないですよ。実際の現場は心の底から遠慮いたしたい所存でございますが。

「それってそこらへんにいる魔物なのか？ やっぱ強いんだよね？ どうやって逃げればいいんだ？」

「すごく弱いし、鍾乳洞の畦石池にしかない希少種だから大丈夫だよ」

そうか、弱いのか。それなら……弱いのか？ こいつの基準で弱いつて言われても、それを鵜呑みにしていいんだろうか。いや駄目だろう。すごく駄目な気がする。

「クルークさん、角蟻ホーエンって弱いんですか？」

左隣に話題を振ってみると、案の定クルークは言葉を詰まらせた。ほーらね、やっぱりね！ 大きくて硬い魔物が弱いわけないですよねー！

「こいつのことは気にしないでいいですから、真実を教えてください。やっぱり強いんですね？　そうとう強いんですか？」

「え？　……ああ、そっか。うん、レスル・クルーク、思ったままを答えて欲しいな」

クルークは推し量るように和樹を見やったが、俺たちは揃ってうんうんと頷いたので口を開いた。

「……一般論としましては、ホーエンは魔法も剣も跳ね返すためとても強靱な魔物として名を知られています。出会うことも稀ですが、出会えば死を覚悟する。そういう類のものです」

「死を覚悟ですか、それはそれは……。さて和樹君、釈明があれば述べたまえ」

「大丈夫だよ、兄さんなら逃げるのも倒すのも簡単だよ」

「いや無理だから。簡単じゃないから」

出会った瞬間硬直するに決まってるだろうけど。DQNに道を塞がれても怖気づく俺が、そんなものに会ったら失神してそのまま突き刺されて死んでしまうわ。

やっぱりこっちの世界はおそろしいんだなあ。魔物なんか出会わないよう、頑丈で安全な家を買ってもらって絶対引きこもろう。そうしよう。

「つか剣も魔法も効かないのに、貰って何？　どうやったんだ？」

「外界を遮断して放置すればいいだけなんだよ」

「うん、わかりません」

「魔法が効かないわけじゃないんだ。程度の弱い攻撃が跳ね返されるだけで、俺や先生なら外殻ごと潰せる。でもそうすると使い物にならないから、気門を塞いで大気と魔力の供給を絶つことで弱らせ

るんだよ」

「へえ」

窒息させるようなものかな。うーん、いくら魔物相手とはいえ、なんかこうもやっとするなあ。珍しい毛皮のために珍しい動物を狩るような居心地の悪さがあるというかなんとか。人里で襲ってくるならともかく、鍾乳洞なんていう辺鄙なところにいるんだったらほっときやいいのと思うけど、どうも希少種なんてレア素材っぽいしそういうわけにもいかないのかな。

しかし先生ってあんなちんまい年寄りなのに、普通なら死ぬかもしれない魔物相手に罠を張るとか捕まえるとか、どれだけ規格外なんだよ。そこまですごいなんて思ってたぜ。悔しいけど、さすが和樹の師匠なだけはあるってことか。

まあ、だからこそあのジャイアニズムとスネオイズムを足したような傲慢で上から目線も許されてきたんだろうけど。実際にとっても偉い魔術師長様でもいらっしゃることだし？

俺は絶対許してなんかやらないが、面と向かって喧嘩を売ったらシャレにならなさそうだ。ここは建前スキルで乗り切るのが賢明だろう。うん、そうしようしよう。

べ、別に逃げてるわけじゃないんですよ、これはそう、大人の社交術というものです。

とはいえこれからご挨拶に出向くわけでして、とても気が重かったりするのでもまた事実。それをお願いごとがあったりするので余計に嫌な感じだ。

今は一応世話になってるわけだし、和樹が先生と慕っているわけだし……慕ってるんだよね？　こんな性格ひん曲がった相手を慕ってて大丈夫か？

「和樹はさ、えー、その、先生のことどう思ってるんだ？」

「師匠だと思っているよ」

「いや、そうじゃなくて。好きとか嫌いとか、俺の知らないところで適度に幸せになっていいから金輪際姿を見せるなとか、いろいろあるだろ」

「うーん、そうだね。先生には感謝してるかな。おかげで生き延びることができたから」

「そ、そうか……」

俺は重石を背負ったようにズーンとへこんだ。そうだった、和樹にとっては命の恩人でもあるんだっけ。すっかり忘れてたな。

そういうことなら俺も悪感情を押さえて感謝しないわけにはいかないし、やはり当初の予定どおり礼のひとつも言わなければならないだろう。

でも鼻で笑われそうですごく嫌だ。それどころか口上の途中で遮られそうだ。あーしそうしそう。人の話とか聞かなさそう。

への字に口を曲げた俺に、和樹は困ったように笑った。

「ごめんね、兄さん。先生は確かにちょっと変わってるけど、裏表がなくてまっすぐな人なんだよ」

「そうは言ってもなあ……いくら偉い人だからって、あの態度はどうかと思うぞ。先生がお前の恩人だというのはわかるけど、でもクルークさんも俺の恩人なんだよ。なのにあれはないだろ」

「うん、ごめんね」

「別にお前に謝ってほしいわけじゃない。謝るな」

「はい、兄さん」

束の間、なんともいえない空気が流れた。気まずい思いを抱えながら、ポットから冷え切ったお茶を注ぐ。特に飲みたいわけでもないのに、俺はちびちびと唇を湿らせた。

「……レスル・クルーク。言いたいことがあれば、言っていいいんだよ」

和樹の言葉につられて、俺はクルークに目を向けた。話を振られたクルークは少し見開いて目を瞬かせたが、すぐにいつもの読めない無表情に戻って俺を見た。

「俺のことはお気遣いなく。過分な待遇に感謝しています」

「クルークさんがなんとも思っていないのはわかってますよ。でも俺が嫌なんです。だって「上手くやった」ってなんなんだ。まるで自分たち貴族との縁ができてよかったなどでもいいかげんなあの態度がムカツク——」

「そうか、そうだったんだね。そういう意味で怒ってたんだ。ごめん兄さん、違うんだよ」

「なにが！」

「先生のそれは、彼を褒めてたんだよ」

「……………はっ？」

和樹はやっと得心がいったとでもいうように、すっきりした顔で笑っている。

反面、俺はきつとピカソのキュビズム画のように複雑な顔をしていたはずだ。

「あれのどこが褒めてんだよ！ どう聞いても貶してただろ！」

「その、えっとね。もし兄さんがレスル姉弟に出会わなくて大変な目に合っていたら、俺はたぶん、すっごく暴れてたと思うんだよね」

「はあ〜？」

お前はいきなり何を言い出すんだ。

俺が再び声を荒げようとしたとき、和樹は手を合わせてお願いのポーズをとった。

「聞いて兄さん。もし兄さんが無事じゃなかったらという仮定の話だけど、たとえばそれが現実だったとしたら、原因が魔物でも人間でも事故だったとしても、俺は容赦しなかったと思う。魔物だったら魔物を滅ぼしただろうし、人間だったら……人間だったとしてもね。だから、先生の言った「上手くやったな」って言葉は、上首尾だな、よくやったっていう意味だったんだよ。よく兄さんを守ったという労いの――」

「わかるかあああああああ！！！」

なんだそのめんどくさい変換は！ 褒めただと！？ あの態度でその意味を酌めと！？ 無理言うな！

俺はちやぶ台返しならぬテーブル返しへの欲求を、縁を掴んでブルブル手を震わせながら自制した。

食べ物は大事故だ、食べ物は大事だ。食べ物は大事故だ。大事なことから3回言いました。

あーもう、なんだよ。なんなんだよ。ひねくれるにしてもほどがあるだろ、難易度高すぎるよ。

腹の底からため息がこぼれ出る。もうどつと疲れた。このまま部屋に戻って不貞寝したい。ふつかふつかのおふとんにダイブして夢の世界で分離した俺の嫁に癒されたい。膝枕は首が痛そうだから添い寝のほうがいいなあ。甘い匂いのする長い髪をクンカクンカして眠りに落ちたら最高だろうなあ。だったら自分の髪を匂っつけてか？ それもそうだな、昨日風呂に入ったし石鹸の爽やかな匂いも悪くないかもな、あはははは。あははははははは。

はあ……。

「あのさあ、お前は俺が怒ってるのはわかってたよな？ 何でだと思ってたんだ？」

「その、先生は自分の都合しか考えないし、人の話をあまり聞かないから、気分を損ねたんだろうなって思ってた」

「ああ、そう……」

俺にはそんなの日常茶飯事だよ。たしかに気分は損ねるけど、それくらいで怒りゲージが上がるはずないだろ。

和樹もずれてるけど、先生も斜め下にずれすぎだ。もう駄目だこの師弟、早くなんとかしなかったから手遅れになってるぞ。俺にはどうにもできないぞこれ。

「クルークさんはわかってました？ 褒められたって」

「いえ、すみません。聞き流していたのでわかりませんでした」

……そうなんだー。さすが傭兵、スルースキルもすごく高いんですねー。

なんだろうこの脱力感。俺ばかり空回りして虚しさ倍増だよちくしょう。

俺ががんばったよね？ もう泣いてもいいよね？ もう引きこもってもいいよね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3408q/>

異世界の弟

2011年3月10日22時23分発行